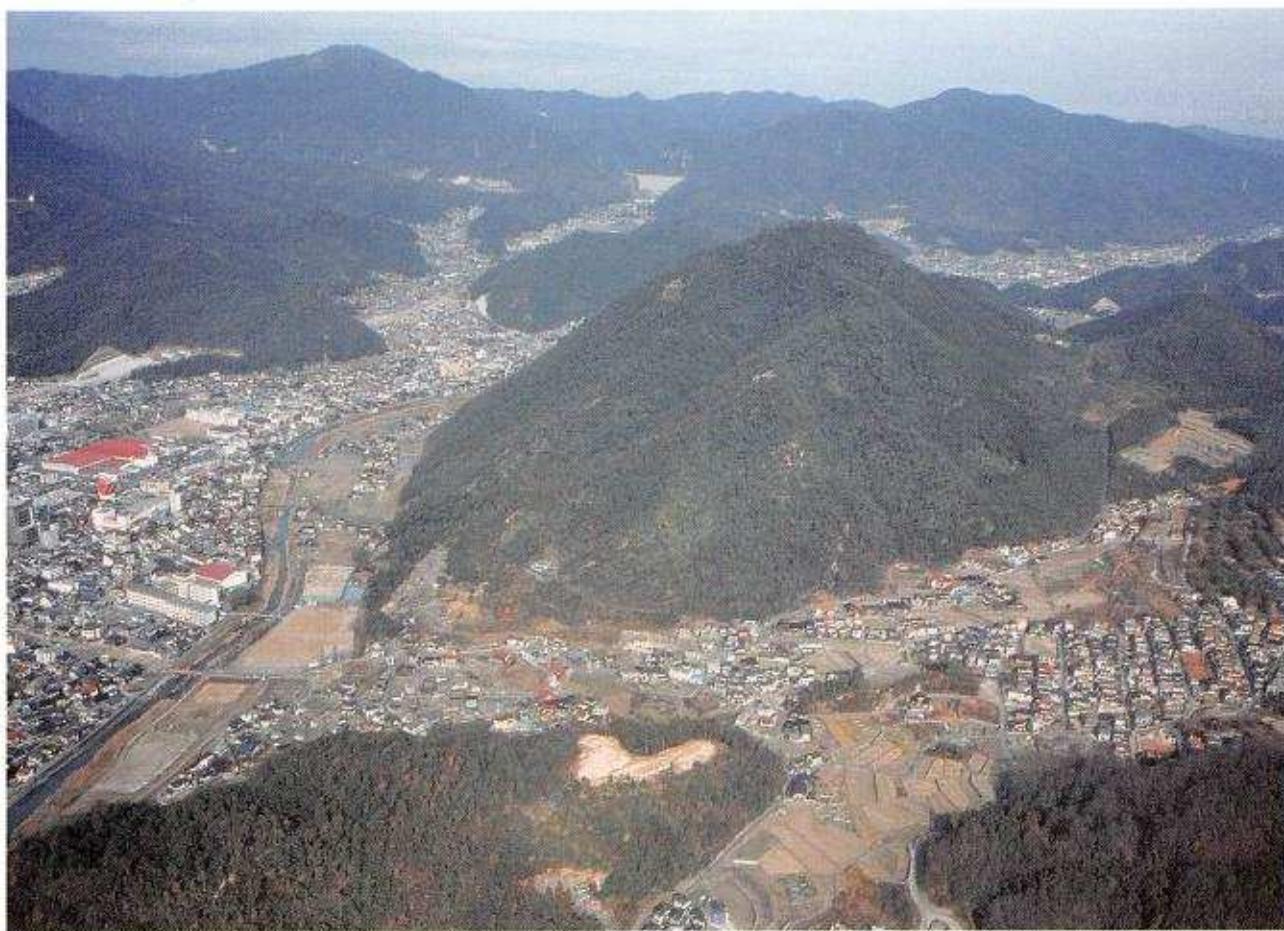


# 寺 山 城 跡

県立可部高等学校移転事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財団法人 広島県教育事業団



1 寺山城跡（手前中央）と高松山城跡（中央）を望む（上空南から）

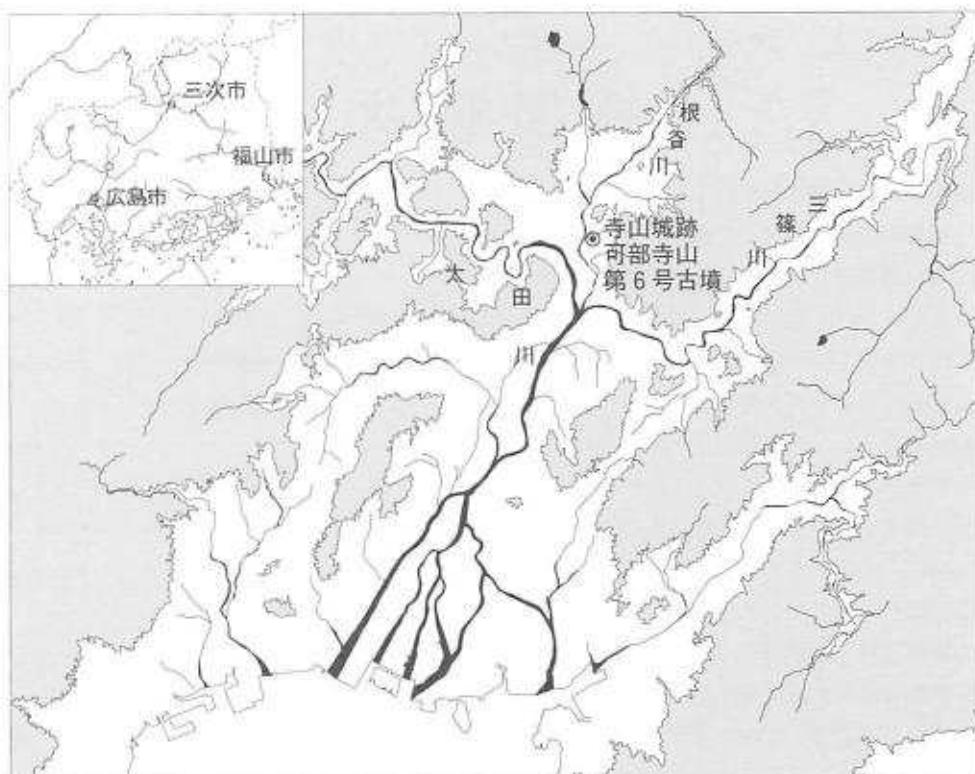


2 寺山城跡全景（上空北東から）

## 例　　言

- 1 本書は、平成14（2002）年度に発掘調査を実施した、県立可部高等学校移転事業に係る寺山城跡・可部寺山第6号古墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、広島県教育委員会から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 報告書作成事業は、平成15（2003）年4月1日から財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの業務を引き継ぎ、実施した。
- 4 発掘調査は、下津間康夫（現 府中市教育委員会）・葉杖哲也・渡邊昭人（現 財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）が担当した。
- 5 出土資料の整理・復元・実測・写真撮影等は、葉杖・渡邊・銀治益生（現 財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）・唐口勉三（現 広島県立世羅高等学校）を中心となつて行った。
- 6 本書は、Iを葉杖、IIを梅本健治、III・IV 1①・V 1を渡邊、IV 1②を鈴木康之（現 広島県立歴史博物館）、IV 2・V 2を銀治・葉杖が執筆し、渡邊・葉杖が編集した。
- 7 本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。

S D : 溝状遺構	S K : 土坑
------------	----------
- 8 挿図の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
- 9 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図「可部」「飯室」を使用した。
- 10 本書に使用した方位の北は、平面直角座標第Ⅲ系の北を示している。



寺山城跡の位置

## 目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	7
IV	遺構と遺物	8
1	寺山城跡	8
	① 検出遺構	8
	② 出土遺物	20
2	可部寺山第6号古墳	23
	① 検出遺構	23
	② 出土遺物	25

## V ま と め

1	寺山城跡について	27
2	可部寺山第6号古墳について	29

## 卷頭図版目次

卷頭図版 1	寺山城跡(手前中央)と高松山城跡(中央)を望む(上空南から)
卷頭図版 2	寺山城跡全景(上空北東から)

## 挿 図 目 次

第1図	寺山城跡周辺遺跡分布図(1:25,000)	3
第2図	寺山城跡周辺地形図(1:2,000)	7
第3図	寺山城跡遺構配置図(1:500)	9
第4図	寺山城跡トレンチ配置図(1:500)	10
第5図	寺山城跡Aトレンチ土層図(1:80)	折り込み
第6図	寺山城跡Bトレンチ土層図(1:80)	11
第7図	寺山城跡Cトレンチ土層図(1:80)	12
第8図	寺山城跡Dトレンチ土層図(1:80)	13
第9図	寺山城跡E・Fトレンチ土層図(1:80)	14
第10図	寺山城跡Gトレンチ土層図(1:80)	15
第11図	寺山城跡H・Iトレンチ土層図(1:80)	16
第12図	寺山城跡S D 1 実測図(1:80)	17
第13図	寺山城跡S K 1 実測図(1:40)	18
第14図	寺山城跡石積遺構・SK 2 実測図(1:40)	19

第15図 寺山城跡出土遺物実測図(1：3) .....	20
第16図 可部寺山第6号古墳遺物出土状況(1：20) .....	23
第17図 可部寺山第6号古墳地形測量図(1：100) .....	23
第18図 可部寺山第6号古墳埋葬施設実測図(1：40) .....	24
第19図 可部寺山第6号古墳出土土器実測図(1：3) .....	25
第20図 可部寺山第6号古墳出土鉄器実測図(1：2) .....	26

## 表 目 次

表1 広島県内有肩式袋状鉄斧出土地地名表一覧表.....	31
------------------------------	----

## 図 版 目 次

図版1 寺山城跡全景（上空北東から）	図版7-1 平坦面5調査前(南東から)
図版2-1 平坦面1調査前(北から)	2 平坦面5(南東から)
2 平坦面1(北から)	図版8-1 平坦面1～4(東から)
図版3-1 Bトレント土層断面(南から)	2 小平坦面(南西から)
2 Cトレント土層断面(南東から)	図版9-1 S K 1(南西から)
3 Gトレント土層断面(北東から)	2 S D 1(東から)
図版4-1 平坦面2東側調査前(東から)	3 石積遺構(北東から)
2 平坦面2東側(東から)	図版10-1 可部寺山第6号古墳全景(南東から)
図版5-1 平坦面2西側調査前(北西から)	2 埋葬施設(南東から)
2 平坦面2西側(北西から)	3 鉄器出土状況(南東から)
図版6-1 平坦面3・4調査前(南西から)	図版11 出土遺物
2 平坦面3・4(南西から)	

# I はじめに

太田川水系根谷川は、山県郡千代田町に源を発し、南西流して広島市安佐北区可部付近で太田川に合流する全長約12kmの河川である。規模は小さいが、上流の高田郡八千代町上根付近での、根谷川と江の川水系巣の川との河川争奪は、その典型的な例として、自然地理の分野では有名な河川である。

太田川水系の水資源は、かんがい用水、水道用水、発電等に利用され、広島市ののみならず芸南地域の生活を支える重要な水資源である。しかし、水源となる脊梁山地から河口までの距離が短いこともあり、降雨の集中する梅雨・台風期には流域一帯は洪水被害にたびたび見舞われてきた。とりわけ、広島市北部の中心市街地を流れる根谷川では、洪水によって多大な被害が発生することが想定されるため、河川改修などによる抜本的な治水計画が強く望まれてきた。

こうした問題を解決することを目的として、建設省（現 国土交通省）では、根谷川河川改修を計画・実施している。この改修では広島県立可部高等学校（以下「可部高校」という）のグラウンドの大半を河川区域とするよう計画されており、移転もしくは代替地が必要な状況であった。このため広島県（以下「県」という）と建設省は対応策を協議し、その結果、平成6年に可部高校を全面移転させることで合意した。これを受けて県では移転先の選定に取り掛かり、平成8年に、現在地に近接し、利便性のよい「寺山地区」を移転先とすることに決定した。

可部高校移転事業の実施に先立ち、広島県教育委員会（以下「県教委」という）は平成13年11月に計画地内にある周知の埋蔵文化財包蔵地である寺山城跡の範囲を確定し、その取り扱いについて、県教委内部で協議を重ねた。しかし、周辺に他の適当な移転候補地がなく、計画地変更等による現状保存も困難であるという結論に達し、平成14年3月、事業の実施に先立ち発掘調査を行うことを決定した。

発掘調査については、平成14年4月に県教委から財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（現財団法人広島県教育事業団 埋蔵文化財調査室、以下「センター」という。）あてに調査依頼があった。これを受けセンターは県教委と同年9月2日付けで委託契約を結び、平成14年10月7日から平成15年1月31日までの約4ヶ月間発掘調査を実施した。なお、1月18日には広島市教育委員会と共に遺跡見学会を開催し、約100名の参加があった。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行なった発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、国土交通省、同太田川工事事務所、県教委、広島市教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

## II 位置と環境

寺山城跡は広島市の中心部から北に15kmの安佐北区可部町に所在する。広島市北部は白木山（標高889.8m）や堂床山（標高859.6m）をはじめとする標高600～800m台の山々が西から東に連なり、その南側に福王寺山・水越山・螺旋山などの標高400～500m台の山塊が存在する。これらの山塊の間を県西北部の中国山地に源を発した太田川が蛇行しながら西から東に流れ、可部の街並みの南西部をかすめるようにして大きく南に流路を変えて広島湾に流れ下る。この太田川が大きく流れを変える辺りの北岸に東西2.3km、南北1.8kmほどの沖積平野が広がる。その東縁を南原川や桐原川などの小河川を集めながら根谷川が南に流れ、やがて旧高陽町の北西部で西流する三瀬川とともに太田川に流入する。この根谷川や南原川・桐原川沿いには幅450～750m程度のごく狭い谷底平野がみられる。可部町は太田川北岸の平野部の東端に位置し、三入荘地頭熊谷氏の居城高松山城の城下あるいは市場町などとして発展したと考えられている。今回発掘調査を行なった寺山城跡はこの可部町中心部の東、高松山の南至近距離にある南北800m、東西375mの南北に長い独立丘陵である寺山（標高102m）の北端に位置する。

可部地域は太田川を中心とする水運や根谷川・南原川沿いに雲石路・石見浜田路といった広島城下と山陰地域を結ぶ街道が、可部市街地の北の下町屋で交わって可部街道となる交通の要衝であると共に、平野部の北辺の福王寺山南麓に築造された80基に及ぶ古墳時代後期の可部古墳群や三入荘地頭熊谷氏の本拠として安芸国の中世史の表舞台に登場する歴史的にも重要な地域である。調査例は多くないが、古墳や山城跡など多くの文化財が存在する。ここでは、可部町周辺の主要な遺跡について、時代順に触れていきたい。

縄文時代 遺跡の発掘調査例はなく、草田・南原（磨製石斧）、城（石塙）、給人原第1号古墳・番谷遺跡（後期の磨消縄文の土器片）など遺物の採集例が散見されるにすぎない。

弥生時代 大半が採集資料だが、墳墓群2か所の調査が行なわれている。採集資料も大半が後期のもので、前・中期の明確な遺物は見つかっていない。後期の遺跡は丘陵端部や平野部の縁辺などに立地し、土取りや工事中などに、弥生土器や石塙・石斧などが偶然見つかったものが多い（可部寺山3号遺跡、城遺跡、南原遺跡、虹山A・B遺跡、上ヶ原遺跡など）。根谷川東岸の小河川が流入する付近の丘陵斜面に立地する王地遺跡では、弥生土器（甕）とともに袋状土坑が検出されている。

丸子山遺跡・番谷遺跡では発掘調査が実施され、箱式石棺墓を主体とする墳墓群を検出している。丸子山遺跡は根谷川東岸の桐原川が流入する辺りの丘陵頂部から南緩斜面にかけて存在する弥生時代中・後期の墳墓群で、密集する15基の箱式石棺墓を検出した。第6号石棺ではイモガイ製の腕輪を装着した女性の人骨が出土し、南方との交流が考えられる。番谷遺跡は太田川北岸の福王寺山から南東方向に延びる丘陵尾根上に立地する弥生時代後期の墳墓群で、箱式石棺墓8基、土坑墓1基を検出した。



第1図 寺山城跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

**古墳時代** 古墳以外の様子は分からない。福王寺山（標高496m）から南に延びた丘陵緩斜面や山麓に密集して築かれている可部古墳群、その南西側の螺山（標高475m）から東側に延びた丘陵尾根頂部に立地する虹山古墳<sup>(3)</sup>、寺山城跡と同じ寺山丘陵の尾根線状に立地する古墳4基からなる可部寺山1号遺跡<sup>(4)</sup>の調査が行われている。

前・中期の古墳としては、虹山古墳・可部寺山1号遺跡のほかに可部古墳群に含まれる上ヶ原古墳群E支群、山田古墳群などがある。虹山古墳は5世紀前頃～中頃に築造された全長24.6mの帆立貝式古墳ないしは小さな方形の造出部を付した円墳で、後円部の頂部中央で長軸を墳丘の主軸に沿わせた大小2基の埋葬施設が検出されている。中心的な1号主体は長さ4.8mの割竹形木棺を納めた土坑墓で、その南西隅には重複して長さ3mの二段掘りの土坑墓（2号主体）が作られている。1号主体は割竹形木棺を安置した断面半円形の掘り込みの両端小口に木炭層が見られ、掘り込み内部から朱の広がりやガラス製小玉、鉄剣、刀子、鉄鎌が、棺外から鉄斧や土師器片（壺・高杯）が見つかっている。可部寺山1号遺跡は4基のうち3基の古墳の調査が行われた。墳丘はいずれも大きく削平されているが、第2・3号古墳では周溝が部分的に残存しており、径10m程度の円墳である。埋葬施設はいずれも木棺墓あるいは土坑墓で、第2号古墳の埋葬施設からはガラス製小玉・鉄剣・刀子が、第3号古墳の埋葬施設からは鉄鎌・刀子が出土した。これらの古墳は出土遺物から5世紀頃に築造されたと考えられる。上ヶ原古墳群E支群は古墳群中最高所にあり、箱式石棺墓を埋葬施設とする古墳5基と竪穴式石室を埋葬施設とする古墳1基で構成される。山田古墳群は根谷川東岸の小丘陵端部に立地する箱式石棺を埋葬施設とする古墳群である。なお、寺山丘陵の周辺に存在した高谷古墳、台古墳、寺山古墳も箱式石棺を埋葬施設とした古墳と考えられている。

後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳としては、福王寺山から南に派生した丘陵周辺に密集して造られた可部古墳群と総称される群集墳がある。西から給人原古墳群（A～C支群、16基）、青古墳群（15基）、原迫古墳群（14基）、上ヶ原古墳群（A～D支群、27基）、城ヶ平古墳群（3基）、九品寺南古墳群（3基）、九品寺北古墳群（2基）の大きく7群から成り、総数80基を数える。径10～20m程度の小規模な円墳が主体で、6世紀後半から7世紀中頃に築造されたと考えられる。

このように、可部地域の古墳は、根谷川西岸に横穴式石室を埋葬施設とする後期の群集墳である可部古墳群が存在し、根之谷川東岸の高松山周辺には箱式石棺墓や木棺墓・土坑墓などの竪穴系の埋葬施設をもつ前・中期の古墳がやや集中的にみられるのが特徴である。

古代『和名抄』所載の安芸国安芸郡十一郷のうち漢弁郷・彌理郷が現在の可部町域にほぼ該当する。漢弁郷は可部中心部を含むその東方の平野部一帯を中心とし、彌理郷はその北東～東側の根谷川沿いの狭小な平野部及び根谷川を挟んだ可部中心部の対岸一帯を中心とすると考えられる。前者は中世の可部荘、後者は同じく三入荘の範囲とほぼ重なる。なお、安芸郡は平安後期から中世にかけて南北（安北郡・安南郡）に分かれ、当地域は安北郡に含まれる。

古代の遺跡は明確なものはみられない。

**中世** 国衙に近い可部地域周辺は安芸国の中核部として、国衙領や巖島社領が集中していた。

鎌倉時代から南北朝時代前期にかけて安芸国守護を歴任した武田氏はこの国衙領・巌島社領が集中する太田川下流域を眼下に望む佐東郡の要害の地に居城（銀山城）を築いた。佐東郡域の太田川右岸には山県郡内の巌島社領（志道原荘・壬生荘）の倉敷地が、可部地域の太田川左岸には可部荘や三入荘の倉敷地が存在し、太田川を利用した物資の集散の拠点であると共に、一方で佐東河社（祇園社の末社）や巌島神社の神入らの活動や佐東郡の「佐東市」「佐東八日市」や三入荘の「南村市」などの市場の存在など、当地域は安芸国中枢部の政治・経済上の重要な拠点であった。武田氏は南北朝時代後期以降、佐東郡・安南郡・山県郡（更には実質的な家臣である熊谷氏が支配する安北郡も含めて）の分郡主として、幕府や大内氏・尼子氏・山名氏などの有力守護大名との間に向背を繰り返しながら、安芸国の国人領主のリーダーとして安芸国を主導していく。

中世の可部地域は三入荘地頭熊谷氏の動向と密接に繋がっている。熊谷氏は武藏国熊谷郷出身で、承久の変後、新熊野社領三入荘地頭職に任せられた新補地頭である。三入荘は平安末期に存在が確認される石清水八幡宮領三入保（前身は国衙領）の後身で、永暦元（1160）年頃に創建された新熊野社の荘園として立荘されたとみられる。鎌倉時代から南北朝時代初期にかけては熊谷氏の一族内の所領をめぐる争論や近接する八条院領可部荘や佐東郡の地頭である武田氏や八木荘地頭の香川氏などによる三入荘への押妨が繰り返される。特に大きいのは、嘉禎元（1235）年の熊谷直時・祐直兄弟の所領争いに基づく三入荘の本・新荘分割で、全所領を本荘方（惣領家・直時系）2：新荘方（庶子家・祐直系）1に分けるものであった。三入本荘は根谷川沿い（居城伊勢ヶ坪城）、三入新荘は桐原川沿い（居城 桐原城＝新城山城）のいずれも狭い谷底平野を中心とする。その後、さらに本荘の上村・下村への分割などがなされたが、14世紀中頃には本荘方がほぼ三入本荘全域の領地を回復する。この14世紀前半の鎌倉幕府の滅亡から南北朝の争乱が始まる混沌とした時期に熊谷氏は武藏国から安芸国に下向したと考えられる。騒然とした時勢に所領の保持や自らの立場の維持のために拠点を遷ざるを得なかつたと思われる。そして、明徳2（1391）年には本荘方・新荘方一揆の契約がなされ、恐らくこの頃に三入本荘・新荘の一円化（安芸熊谷氏の実質的な統一）が実現したと考えられる。更に、14世紀後半以降、戦功等により隣接する可部荘内の諸領地を与えられ、実質的に可部荘域もほぼ熊谷氏の支配下に入るようになる。一方、14世紀中頃には熊谷氏は安芸国守護武田氏の家臣となったと考えられ、以降16世紀初頭まで安芸国分郡主武田氏の有力輩下として一貫して北朝方・室町幕府に与力する。だが、応仁の乱後の佐西郡における巌島神主家の後嗣争いや神領衆の分裂、更には出雲尼子氏の安芸国侵入などに起因した安芸国の政治情勢の不安定化の中で、武田氏は大内氏に叛旗を翻した。そして、永正14（1517）年の第2次有田合戦において大内氏に与する毛利元就に敗れ、これ以降武田氏は大きく衰退する。そして、熊谷氏は毛利元就の調略によって、恐らく大永2（1522）年頃には武田氏から離れ、毛利氏の配下となり、武田氏に対するために居城を三入荘中央の伊勢ヶ坪城から南端の高松山城に移したとみられる。その後、武田氏（1541年）、大内氏（1557年）、尼子氏（1566年）が相次いで滅亡し、中国一円の太守となった毛利氏の直属の家臣として、熊谷氏は17世紀初頭に毛利氏が長門国萩に移るまで可部地域一帯の支配を行なった。

この時期の遺跡で調査が行なわれたものは皆無だが、山城跡として舟山城跡・高松山城跡・觀音寺山城跡・新城山城跡・伊勢ヶ坪城跡などがある。舟山城跡（比高23m）は可部莊域北端中央の平野部にある独立丘陵に築かれており、武田氏家臣山中祐成の在城が確認される。中央に堀切を挟んで南北に郭を配した簡素な造りで、享禄2（1529）年に熊谷信直に攻められて落城している。高松山城跡以下の諸城跡はいずれも三入莊地頭熊谷氏関係のもので、新莊方の居城である新城山城跡を除くといずれも本莊方の城跡である。新城山城跡（桐原城跡、比高34m）は桐原川南岸の丘陵端部に築かれた新莊方の拠点で、背後に櫓台をもつ主郭とその東側山腹に2か所の郭、南西側背後に堀切と豎堀、その東側及び北側斜面に各3条の豎堀群を配している。伊勢ヶ坪城跡（比高36m）は熊谷氏が武藏国から移ってきて最初に築いた城で、三入莊ほぼ中央の根谷川を西に望む南西—北東方向に長い独立丘陵に立地する。南西側に3本の堀切を設け、その北東側に細長い郭を4つ配し、東端に1～2本の堀切がみられる。最も東側の郭には高さ1m余りの石垣が残っている。高松山城跡はこの伊勢ヶ坪城跡の南西4kmほどの根谷川とその支流南原川が合流する地点を北西側眼下に望む標高339m、比高289mの山塊に築かれた大規模な山城跡である。郭は東西線を基軸に南方向にも派生させたT字形に連続的に配されており、大小22の郭で構成される。南端には堀切があり、石垣や井戸の存在も確認されている。北側山麓には巨石を用いた石垣と堀が囲繞する一辺60m程度の方形の土居屋敷跡が存在する。觀音寺山城跡（比高144m）は高松山の北1kmの根谷川を挟んだ対岸の丘陵頂部に築かれた山城跡で、東側山麓には熊谷氏の菩提所觀音寺跡が所在する。この寺は巨石を用いた石垣で囲まれて、防御機能も備えており、觀音寺山城跡はこの寺の詰城の機能を果たしたとみられている。

山城以外では、番谷遺跡で箱式石棺群の下方の斜面で2.1m×2.4mの大きさの平面五角形の配石遺構が見つかっており、礫間から出土した土師質土器から中世のものとみられている。<sup>3)</sup>

#### 註

- (1)石田彰紀「丸子山遺跡」「日本考古学年報」29（1976年版）日本考古学協会 1978年  
広島県立可部高等学校史学研究部「丸子山遺跡調査記録」「はにわ」第16号 1977年
- (2)財団法人広島市歴史科学教育事業団「番谷遺跡発掘調査報告」 1997年
- (3)虹山古墳発掘調査団「虹山古墳発掘調査報告」 1989年
- (4)財団法人広島市文化財団が2002年に発掘調査した。  
財団法人広島市文化財団「第21回青空ミュージアム in 可部寺山1号遺跡発掘調査現地説明会資料」 2002年
- (5)註2と同じ

#### 参考文献

- 竹内理三編『角川日本地名大辞典 34 広島県』角川書店 1987年  
後藤陽一監修『日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名』平凡社 1982年  
広島県立可部高等学校史学研究部「可部地方の縄文・弥生文化」「はにわ」第14号 1975年  
松岡久人編『可部町史』広島市役所 1976年  
広島県『広島県史』中世 通史Ⅱ 1984年  
東京大学史料編纂所「熊谷家文書」「大日本古文書家わけ十四」財団法人東京大学出版会 1937年  
河村昭一「郷土資料 安芸武田氏」広島市祇園公民館 1984年  
錦織勤「安芸熊谷氏に関する基礎的研究」「日本歴史」437号 吉川弘文館 1984年

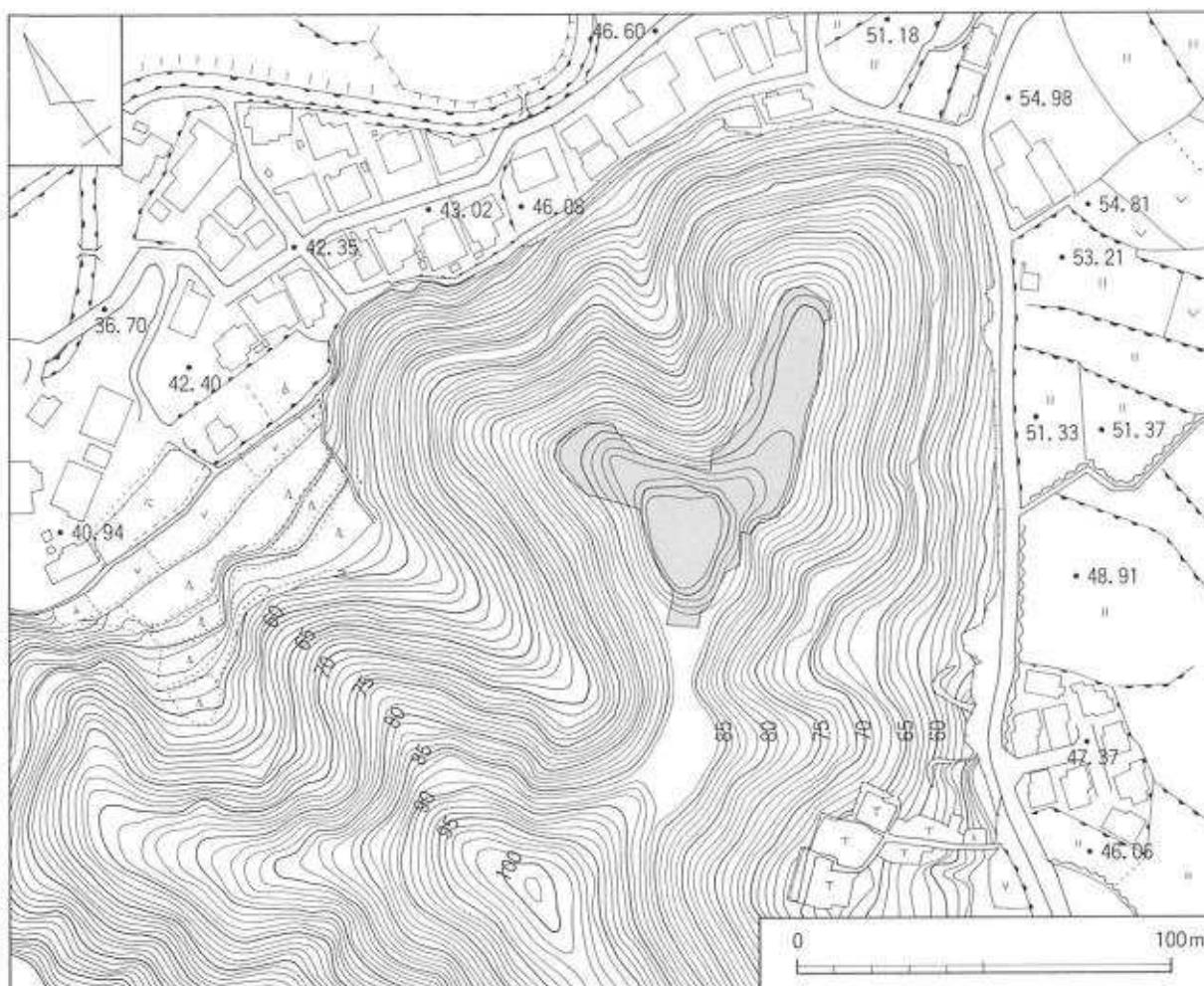
### III 調査の概要

寺山城跡は根谷川左岸の独立丘陵上、その丘陵の北東に延びる尾根上（標高84～91m）に立地する。本城跡からは西に可部の町を、北に高松山城跡の南～南東部を、南西には太田川下流側を10km以上望むことができる。

調査前の現状は雑木林となっていた。ただ、地元の人によれば、城跡を含む尾根一帯は昭和30年代まで耕作地として利用されていたとのことである。

調査の結果、5つの平坦面と1つの小平坦面及び時期不明の遺構を確認した。平坦面の配置は北に開くL字形である。ほぼ中央に最高所の平坦面1があり、北東に平坦面3・4、北西に平坦面5が位置し、平坦面2は平坦面1の東半をめぐる。また、小平坦面は平坦面1の南側斜面にある。いずれの平坦面においても城跡に伴うと考えられる遺構は確認できなかった。時期不明の遺構としては、SK1・SD1（平坦面3）、SK2・石積遺構（平坦面5）を検出した。出土遺物は、中世の土器は土師質土器（皿）が数点で、大部分が近世の陶磁器類である。

また、平坦面2の造成土の下から、可部寺山第6号古墳を検出した。築城に伴い大部分が破壊されているが、古墳を区画する溝と埋葬施設が残存していた。溝から土師器（甕形土器）が1個体分出土し、埋葬施設から鉄斧1点、鉄鎌1点を検出した。時期は5世紀代と考えられる。



第2図 寺山城跡周辺地形図（1：2,000）  
網目は調査範囲

## IV 遺構と遺物

### 1 寺山城跡

調査前には既に主要な5箇所の平坦面を確認できたが、平坦面では昭和30年代まで畠が営まれており、遺構の残存状況は不明であった。調査は遺跡の平坦面を中心に実施した。まず、各平坦面中央に長軸方向に1本（A・C・D・Gトレンチ）、それと直行する方向に各1～2本（B・E・F・H・Iトレンチ）トレンチを設けた。これらのトレンチのうち、G・Iトレンチを除くトレンチは各平坦面間の関連性を知るために調査区際まで延長している。その後、土層堆積状況、遺構面の数、遺構の有無や密度等を確認するためにトレンチ調査を行い、それに基づいて遺構検出面まで表土を取り除き、遺構の検出をおこなった。これらの掘り下げは全て人力によって行った。

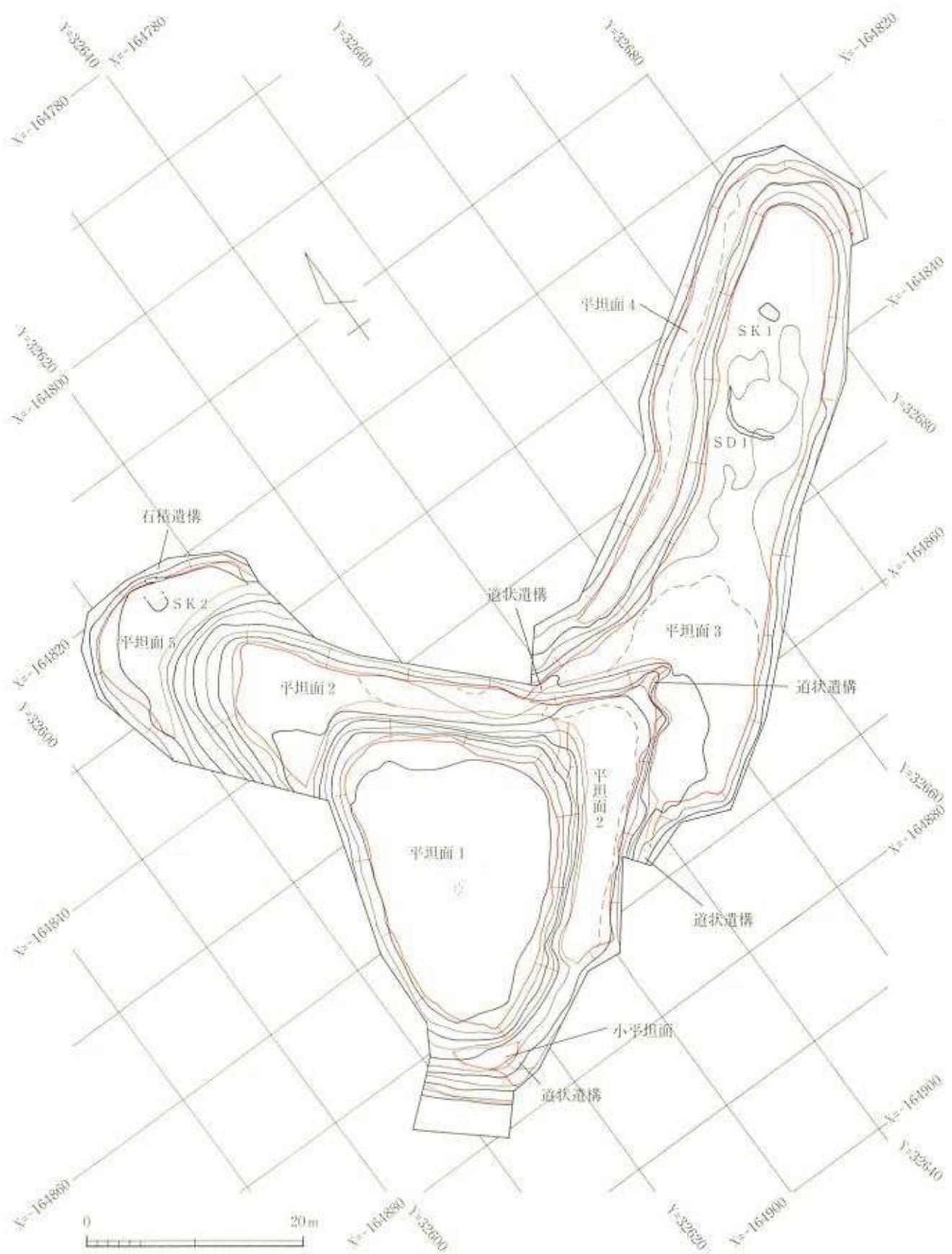
#### ① 検出遺構

検出した遺構は、平坦面5箇所、小平坦面1箇所、土坑2基（SK1・2）、溝状遺構1基（SD1）、石積遺構1基、道状遺構4基である。以下では、各平坦面を説明する中でその他の遺構について述べていく。なお、城南側の尾根は平坦になっており、備前焼（甕）の口縁部片が地山直上で出土した。

#### 平坦面1（第3図、図版2、8-1）

平坦面1は本城跡のほぼ中央にあたり、標高91.0～91.25mで最高所となる。規模は長さ25m、幅19mの隅丸三角形状で、北東側と南東側はほぼ直角になるように造られている。面積は約367m<sup>2</sup>である。地表の一部は畠状に凹凸しており、かつて畠であったことが窺える。地表には厚さ10cm程度の腐葉土層、その下に厚さ10～20cmの淡灰褐～灰褐色土層が堆積していた。これらの土層からは近世～近・現代の陶磁器が出土しており、畠の耕作土と考えられる。この土層の下は、平坦面中央部では風化花崗岩の地山面が、周縁部では平坦面1の周縁に施された盛土の上に水平に堆積した黄褐色土層が認められた。地山面及び黄褐色土層は連続した一つの水平面となっており、この面が遺構面と考えられる。しかし、この面で遺構や遺物は確認できなかった。周縁の盛土には主に黄白色砂質土を使用していた。この土は粗粒で締まりがなく、崩れ易いことから斜面下に締まりのある土を水平もしくは周縁側が高くなるように盛って土留めを兼ねた造成の基盤面としている。さらにGトレンチでは土留めの層（暗黄褐色土）に30cm大の石が含まれており、一部には石材による土留めがおこなわれたと考えられる。これらの土層観察から、平坦面1は丘陵頂部を削り、その土を周囲に盛ることによって造り出されたと考えられる。平坦面1の周囲は主に北東辺及び南東辺を盛土によって切岸とし、そのほかは自然の急斜面を利用して、防御機能を高めている。

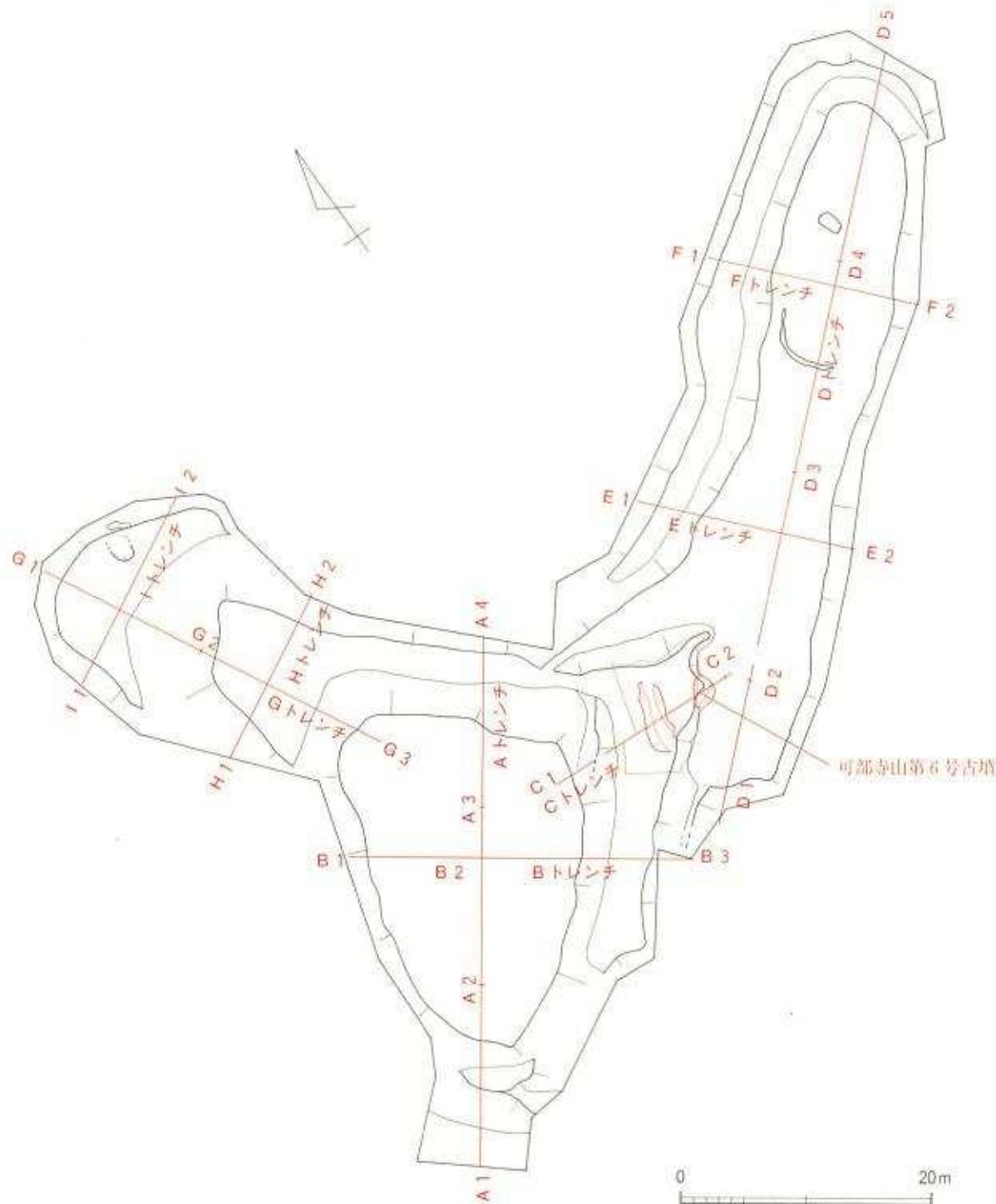
以上のように平坦面1では遺構、遺物は確認できなかったが、平坦面1の南西側斜面で土師質



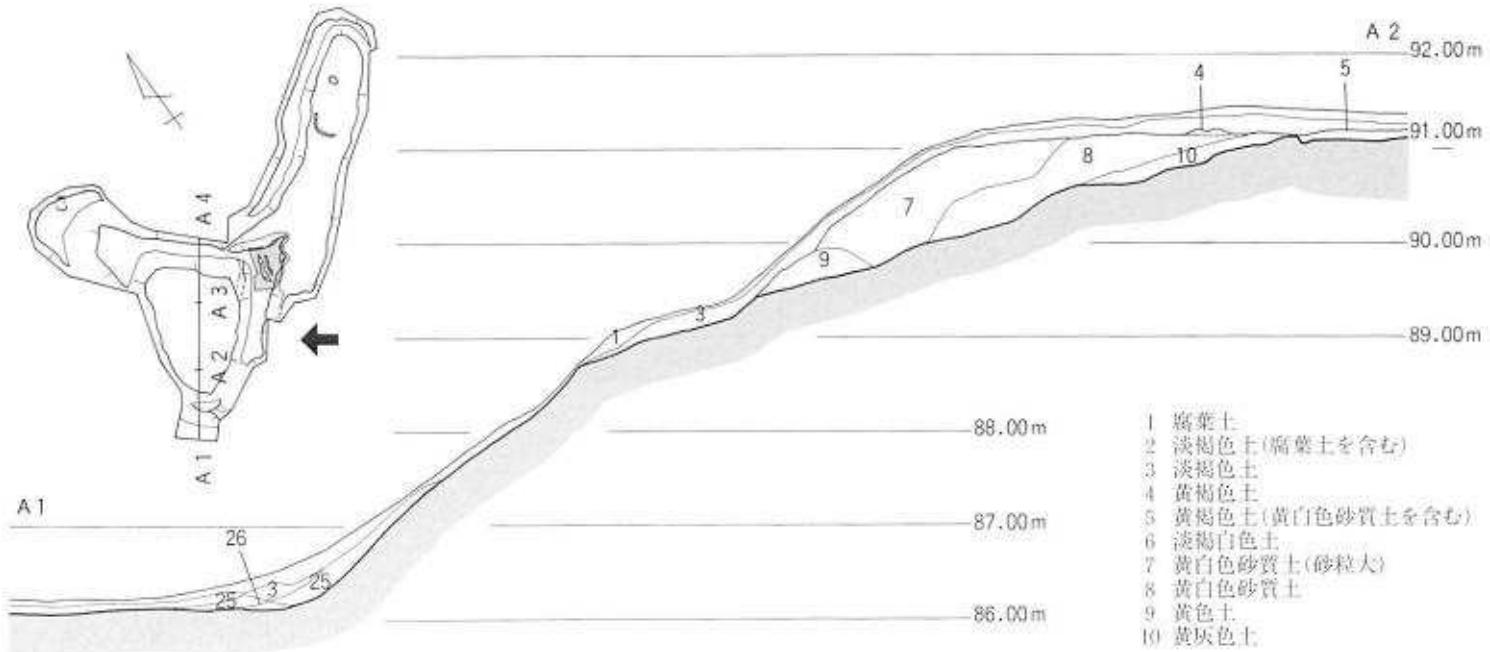
第3図 寺山城跡遺構配置図（1:500）

土器（皿）を検出した。Bトレンチ付近の土留めの土層（黄色土）上面で出土したが、盛土施行（築城）時に伴うものであるか、平坦面1から落ちたものであるかは不明である。

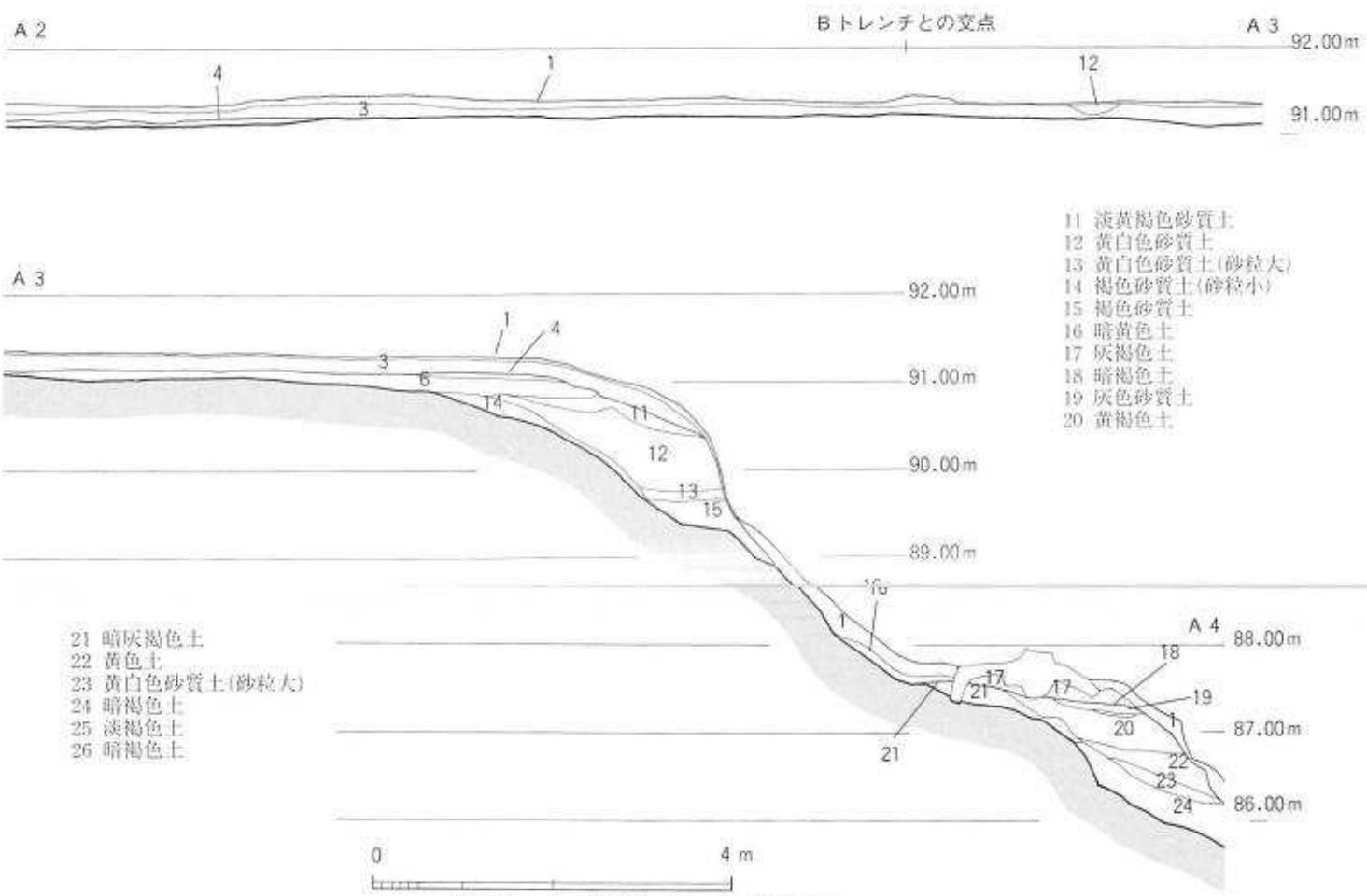
平坦面1の南西斜面には、小平坦面がある。先の土師質土器出土地点よりもやや下方にあたる。規模は長さ6m、幅2mの半円形である（面積約8m<sup>2</sup>）（図版8-2）。標高は88.5~89.0mで、平坦面1より2.25m低く、南西側尾根より4.75m高い。平坦ではあるが、斜面側に傾斜する。盛土を施さず、斜面を削っただけの簡単な作りである。また、道状遺構が小平坦面から南方向へ下り、調査区外へ延びる。小平坦面や道状遺構からの出土遺物はなく、いずれも時期不明である。



第4図 寺山城跡トレンチ配置図（1:500）



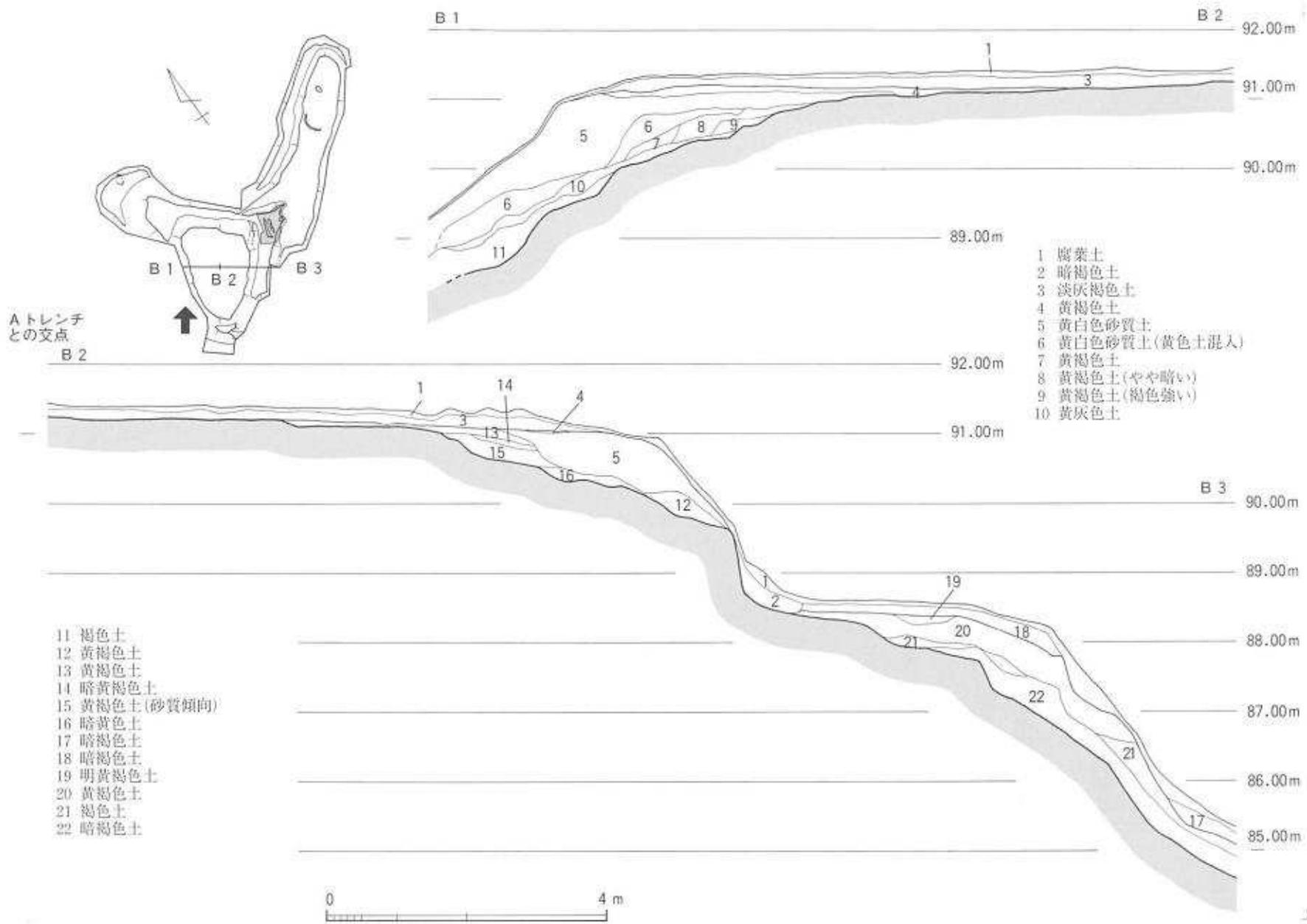
- 1 黑葉土
- 2 淡褐色土(黑葉土を含む)
- 3 淡褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 黄褐色土(黄白色砂質土を含む)
- 6 淡褐色土
- 7 黄白色砂質土(砂粒大)
- 8 黄白色砂質土
- 9 黄色土
- 10 黄灰色土



- 11 暗黃褐色砂質土
- 12 黄白色砂質土
- 13 黄白色砂質土(砂粒大)
- 14 褐色砂質土(砂粒小)
- 15 褐色砂質土
- 16 暗黄色土
- 17 暗褐色土
- 18 暗褐色土
- 19 灰色砂質土
- 20 黄褐色土

- 21 暗灰褐色土
- 22 黄色土
- 23 黄白色砂質土(砂粒大)
- 24 暗褐色土
- 25 淡褐色土
- 26 暗褐色土

第5図 寺山城跡Aトレンチ土層図 (1 : 80)



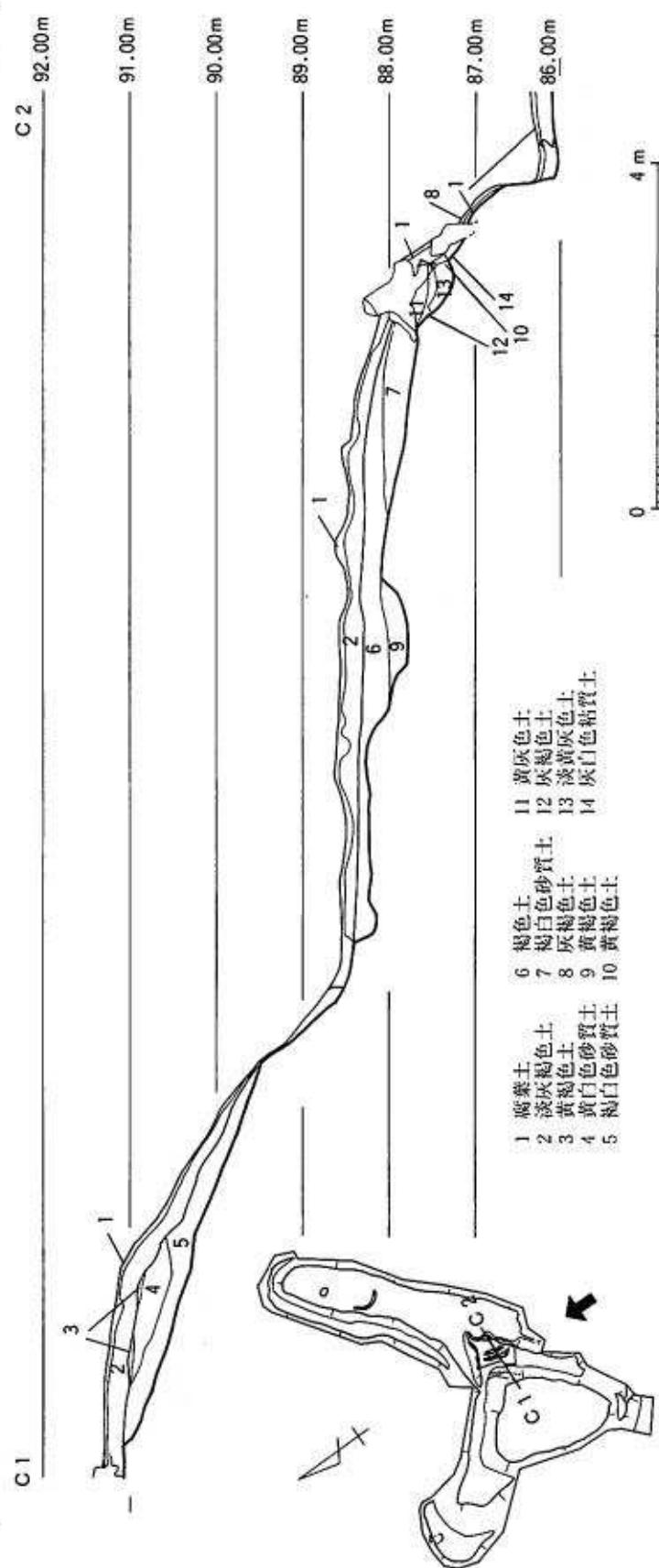
第6図 寺山城跡Bトレンチ土層図 (1:80)

## 平坦面2(第3図、図版4・5・8-1)

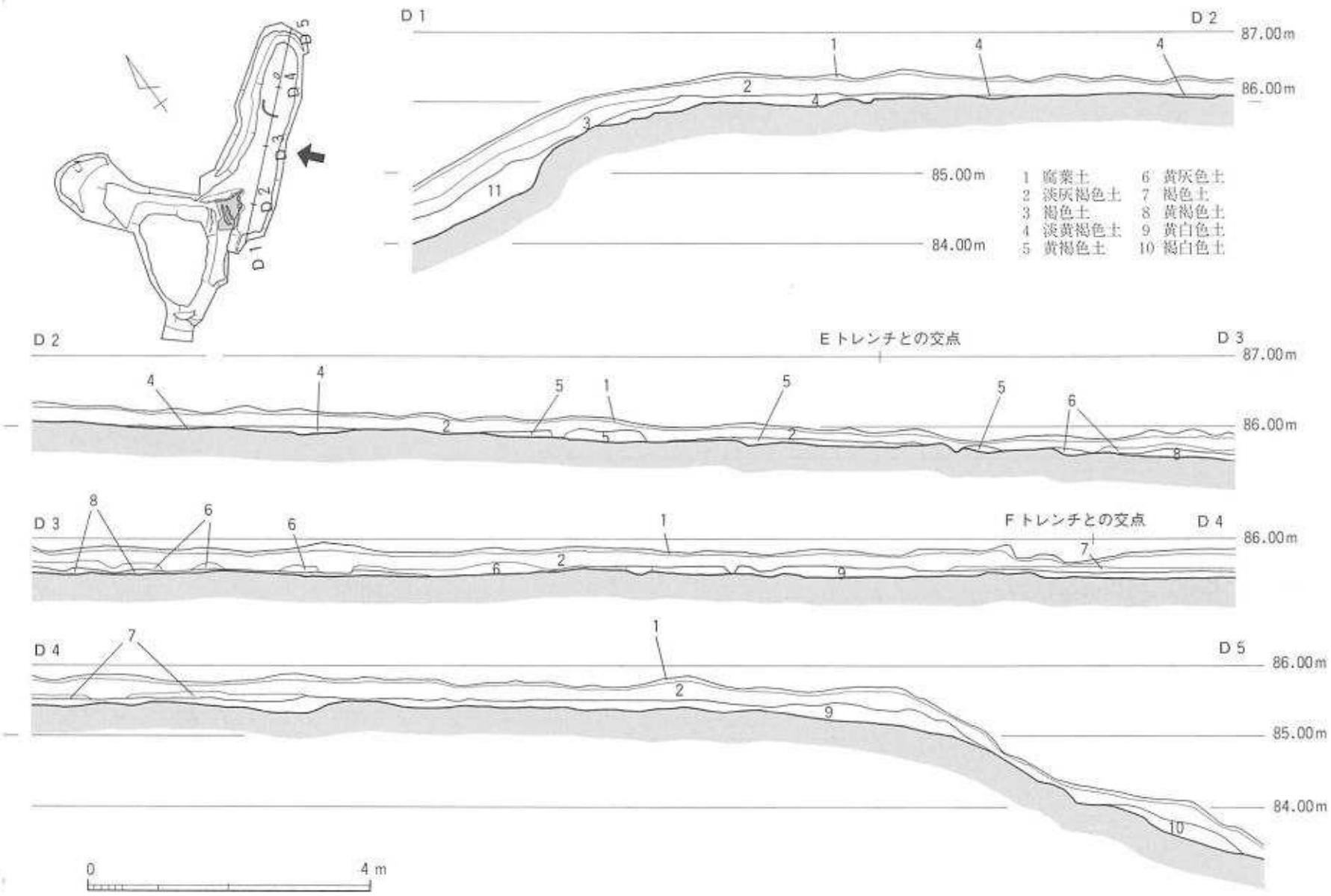
平坦面2は平坦面1の東半をめぐる。面積約250m<sup>2</sup>、標高は87.25~88.25mで、平坦面1より3m低く、平坦面3より2.25m、平坦面5より4.25m高い。

平面的には東部・中央部・西部に大きく三分割でき、三者で土の堆積状況が異なる。規模は東部と西部が広く、中央部は両者を結ぶ通路状となる。東部は長さ約24m、幅3~7.5m、北東~南西方向に細長い長方形状で、東に若干突出する。西部は長さ約10m、最大幅約11m、北西に閉じる台形状である。中央部は長さ約21m、幅1.5~3mである。斜面はいずれも急で、特に北東辺と南東辺は切岸と呼ぶにふさわしい急傾斜である。これらの傾斜は平坦面下方を削りだすのではなく、平坦面前面に土を盛ることによって造り出されている。

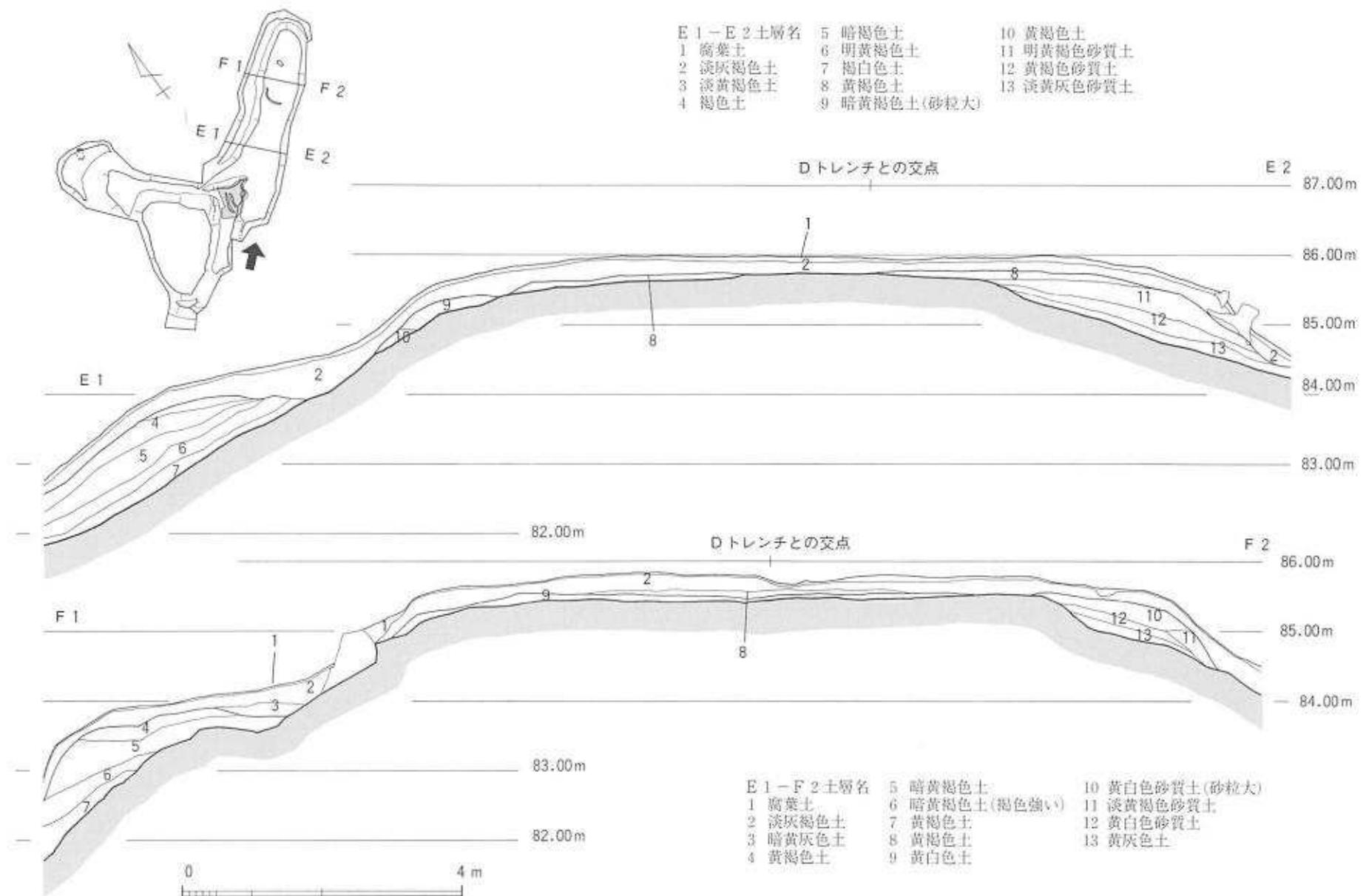
東部は、現状では地表の一部が畠状に凹凸しており、かつて畑であったことが窺える。平坦面3と接する南東辺の斜面は切岸がさらに急角度に削られており、とりわけ東突出部付近では半円状にえぐるように大きく掘削されていた。掘削状況から近・現代の所作と考えられる。土層は、厚さ約6cmの腐葉土層の下に耕作土と考えられる淡灰褐色土層、暗褐色土層が厚さ約12cm程度ある。耕作土層からは近世~現代の陶磁器が出土した。なお、山側端には溝が掘り込まれており、土層観察から、開墾時以降に利用された溝と考えられる。これらの層の下には水平に堆積し



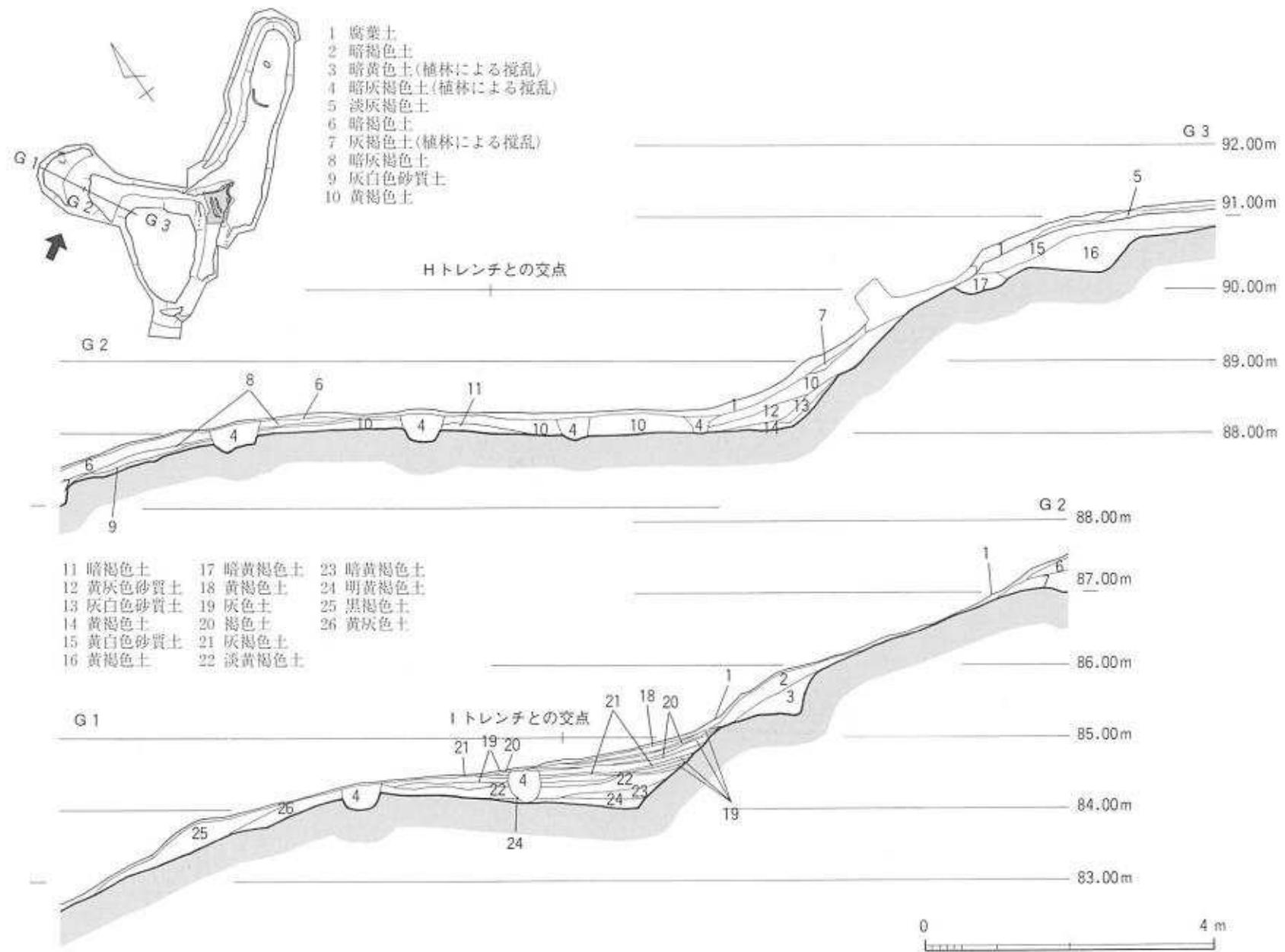
第7図 寺山城跡Cトレインチ土層図(1:80)



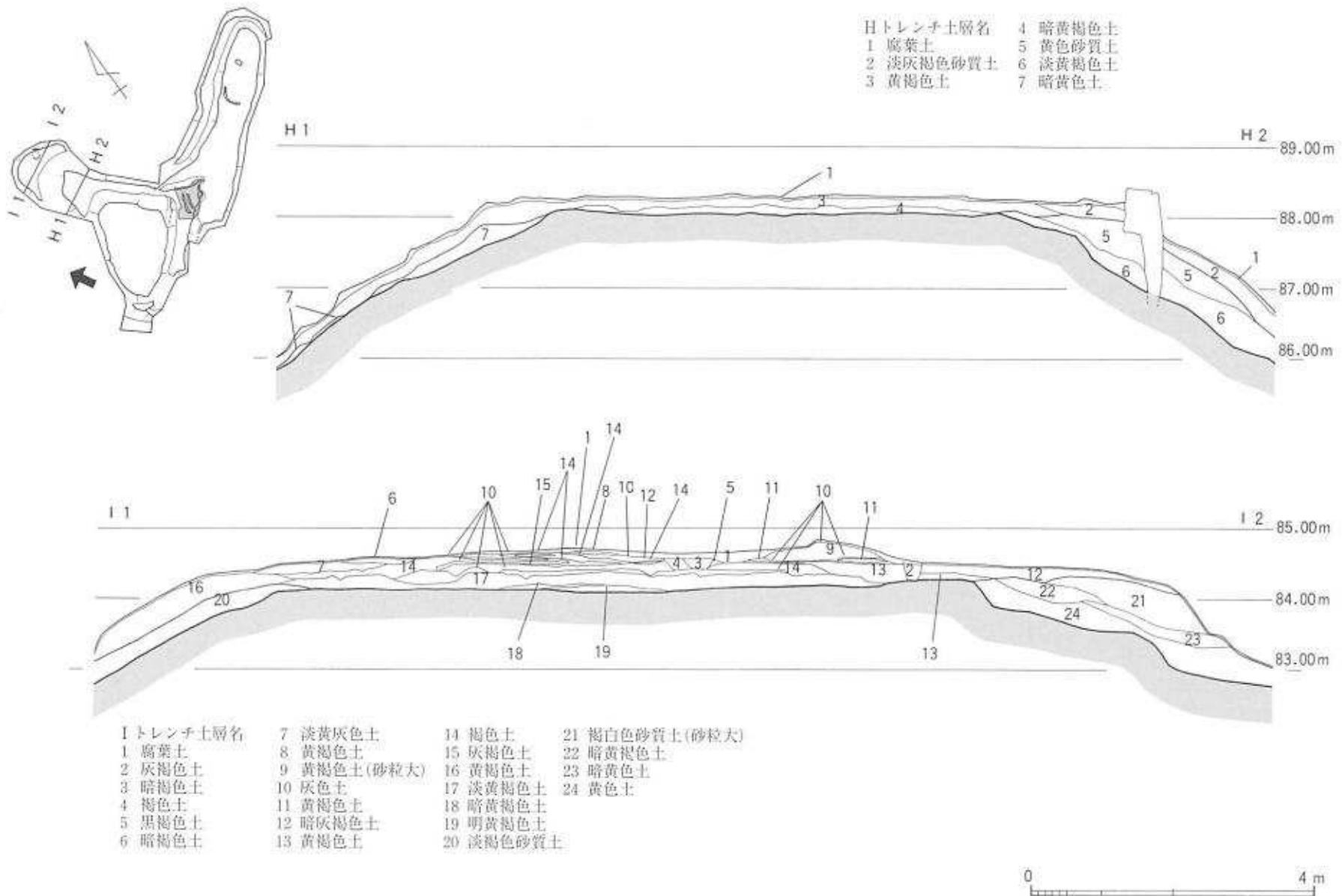
第8図 寺山城跡Dトレンチ土層図 (1 : 80)



第9図 寺山城跡E・Fトレンチ土層図 (1 : 80)



第10図 寺山城跡G レンチ土層図 (1 : 80)



第11図 寺山城跡H・Iトレンチ土層図 (1:80)

て面をなす明黄褐色土層や黃褐色土層、褐色土層があり、堆積状況から、これらの層の上面が遺構面と考えられる。しかし、遺構や遺物は確認できなかった。なお、東への突出部では整地土の下で可部寺山第6号古墳を検出した。

中央部は谷が深く入りこむ地形的制約から、地山の削り出し部分が狭く、大半が盛土により構築されている。土層は、厚さ約14cmの腐葉土層の下が厚さ約6cmの暗褐色土層、灰褐色土層である。遺構面は灰褐色土層上面と考えられるが、遺構、遺物は検出できなかった。その他、中央部ではそれぞれ平坦面1及び平坦面3へつながる通路状の部分が認められた。両者とも斜面を掘り込んだだけの簡単な作りで、前者は平坦面1の造成土を切り崩して造られている。遺物は出土していないが、造成状況から、城に伴わなものと考えられる。

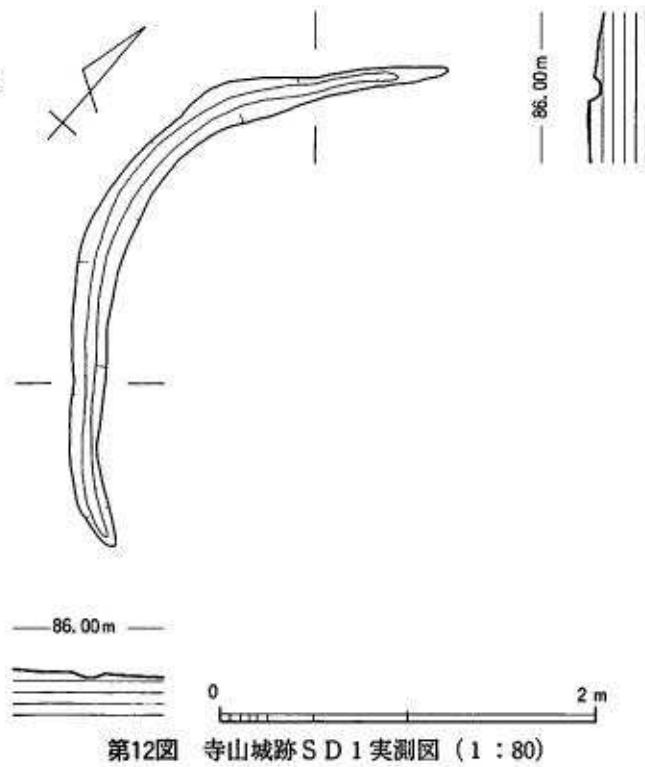
西部では、厚さ約10cmの腐葉土層の下に黃褐色土層が厚さ約30cmあり、その下は遺構面と考えられる風化花崗岩の地山面である。黃褐色土層中からは近世の遺物が出土した。なお、この土層を掘り込んだ直線的な溝を3条確認したが、これらは近・現代に植林のために掘り込まれた溝と考えられる。盛土は主に東周縁部に行われ、西周縁部ではわずかに、北周縁部では行われていない。遺構、遺物は確認できなかった。

### 平坦面3（第3図、図版6・8-1）

城跡の東に位置する最も大きな平坦面で、北東～南西方向に長い平坦面である。北東半はほぼ同じ幅（7.8～9.8m）で、南西半では幅が広がり二股に分かれる（面積約503m<sup>2</sup>）。このうち西に分岐した部分は、基部では幅が約7mあるが、次第に幅を狭め、南西端では通路状を呈し平坦面2へとつながる。その部分では幅は50cmに満たない。平坦面3の標高は85.3～86.0mで、南西から北東に向かって緩やかに下る。周囲の斜面は北東～南東辺は緩やかで防御性は低い。北西辺は急斜面の自然地形を利用した切岸状となっていたと考えられるが、すぐ下方に平坦面4が存在するため不明である。

現状では部分的に耕作時の歴跡が観察できた。土層は、厚さ約10cmの腐葉土層の下に耕作土と考えられる厚さ約20cmの淡灰褐色土層がある。淡灰褐色土層中からは近世の遺物が出土した。この直下が遺構面と考えられるが、土層が安定していない。盛土は主に南東側周縁に施され、北西側はほとんど盛土していない。遺構は北東寄り中央付近からSD1、SK1を検出した。

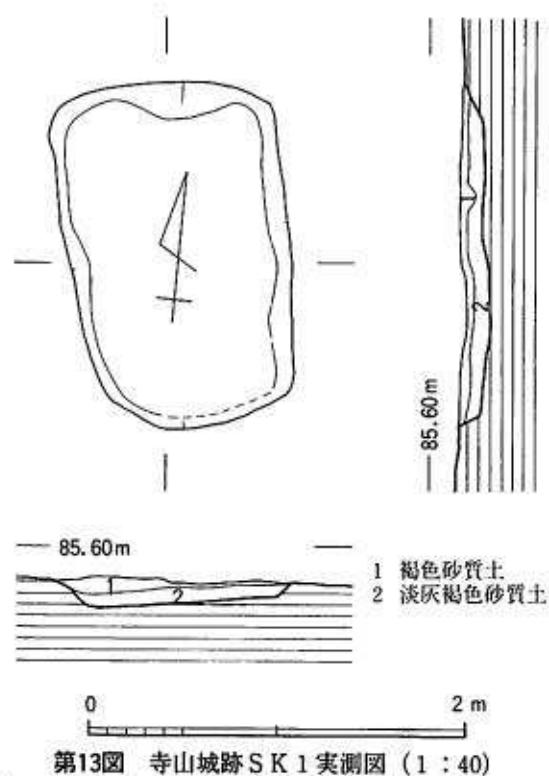
### SD1（第12図、図版9-2）



SD 1 は SK 1 から 7 m 程度西に位置する。東側に湾曲した溝状遺構で、現存規模は長さ 6.2 m、幅 0.22~0.46 m、深さは最大で 0.15 m、断面形は半円状である。本来は円形もしくは隅丸方形に溝がめぐっていたと考えられる。溝の内側（湾曲内部）は周囲の標高よりもわずかに高くなる。出土遺物はなく、性格は不明である。

#### SK 1 (第13図、図版 9-1)

平面形は、北側の幅がやや広くなった隅丸方形の土坑である。規模は、長さ約 1.8 m、幅 1~1.2 m、最大の深さ約 0.28 m で、長軸は N 12° W である。底面はほぼ水平である。遺物は覆土上面から時期不明の土器小片がわずかに出土している。時期・性格など不明である。



第13図 寺山城跡 SK 1 実測図 (1 : 40)

#### 平坦面 4 (第3図、図版 6・8-1)

平坦面 4 は平坦面 3 の北側をめぐり、北東端では平坦面 3 に沿って湾曲する細長い帯郭状の平坦面である。規模は長さ 46 m、幅 0.8~3.8 m、面積約 118 m<sup>2</sup>、標高 83.5~84.0 m である。谷に面した北西辺は急傾斜になっている。厚さ 2~7 cm の腐植土層とその下には淡灰褐色土層が 20~50 cm 堆積していた。平坦面の構築は大半が盛土によるものである。遺物は、E トレンチ付近から、遺構面から 5~10 cm 程度浮いた状態で土師質土器の皿が出土したが、いずれも小片である。

なお、平坦面 4 西端の盛土から樹皮が残った状態の炭化物を検出していることや、土層観察から伺える平坦面造成の状況が他の平坦面と異なっており、この面は、近世~近・現代に構築された可能性が高い。

#### 平坦面 5 (第3図、図版 7)

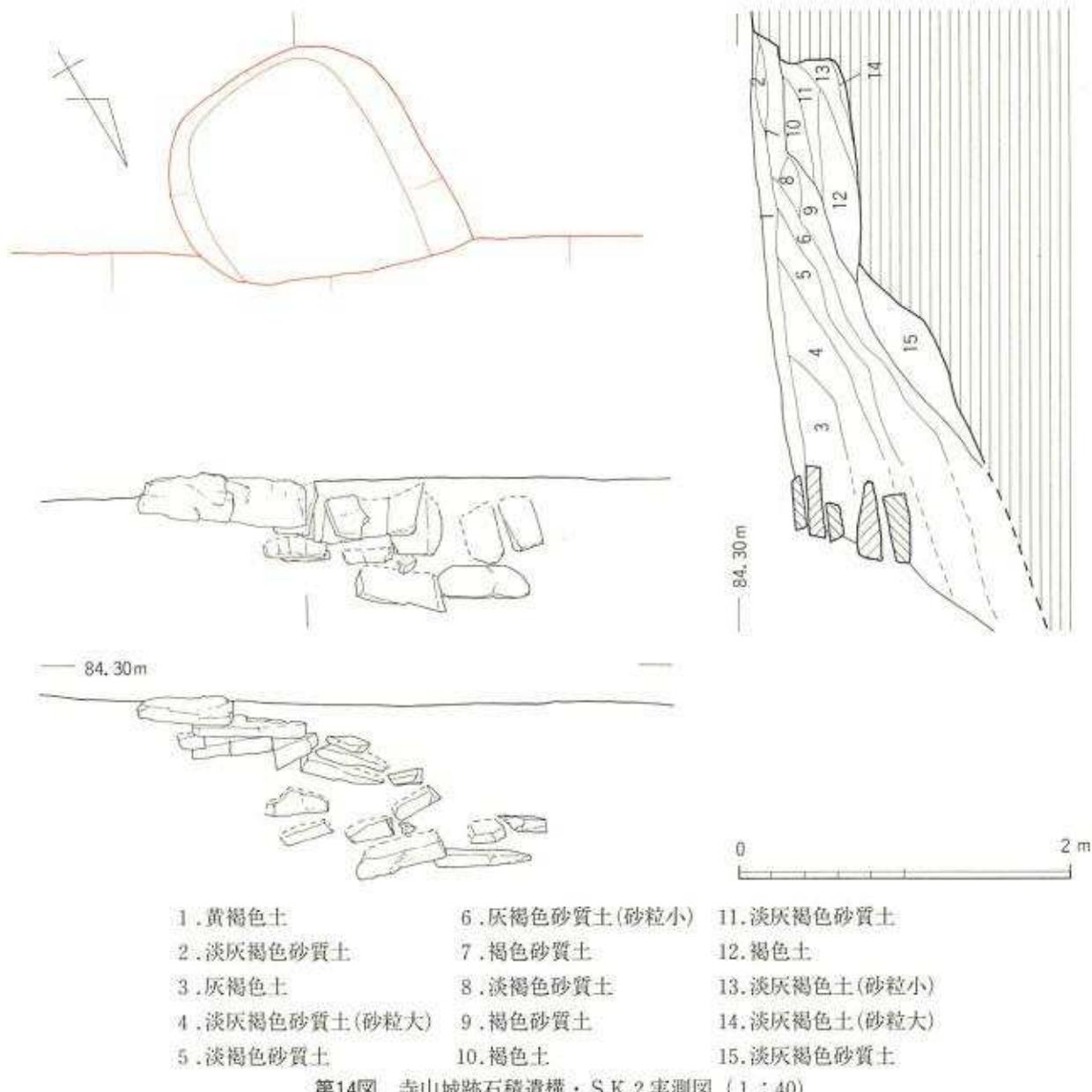
平坦面 5 は城の北西端にあたり、平坦面 2 の西部の斜面下に位置する。平面形は不整な三日月状で、規模は長さが 17 m、最大幅が 6.2 m、面積約 85 m<sup>2</sup>、標高 84.0 m である。北東辺及び南西辺は自然地形を利用して防御したと考えられ、特に北東辺の傾斜は急である。しかし、尾根筋に沿った北西辺の傾斜は緩やかになっている。土層は、厚さ約 10 cm の腐植土層の下は灰色土層と褐色（黄褐色）土層の互層である。互層は地形に沿うように堆積し、層の境が明瞭で、層中からは近・現代の遺物が出土していることから、後世の地形改変に伴うものと考えられる。遺構面は互層の下にある風化花崗岩の地山面と考えられる。東周縁には盛土が施されるが、西側ではわずかである。北側斜面では石積遺構を確認した。さらに石積遺構の背後で SK 2 を検出した。なお、覆土から須恵器の杯身の高台部が出土した。

### 石積遺構（第14図、図版9-3）

平坦面5の北側法面にあり、規模は長さ1.8m、高さ0.9mである。石の上面はほぼ水平で、階段状に東から西へ下がっている。使用された石材は長さ50cm、幅30cm、厚さ10cm程度で、板状である。石積遺構は平坦面の盛土を壊して作られており平坦面よりも新しい時期の遺構と考えられるが、出土遺物がなく明確な時期は不明である。

### S K 2（第14図）

平坦面5の北側、石積遺構の背後に位置する、平面形が楕円形と考えられる土坑である。土層観察から、北側を石積遺構の造成時に壊されたと考えられ、本来の規模は不明であるが、残存規模は長さ1.5m、幅1.5m、深さ0.4mである。石積遺構よりも古い時期の遺構であるが出土遺物がなく、時期や性格は不明である。



## ②出土遺物（第15図、図版11）

中世の遺物としては、ごく少量の土器・陶器が出土している。

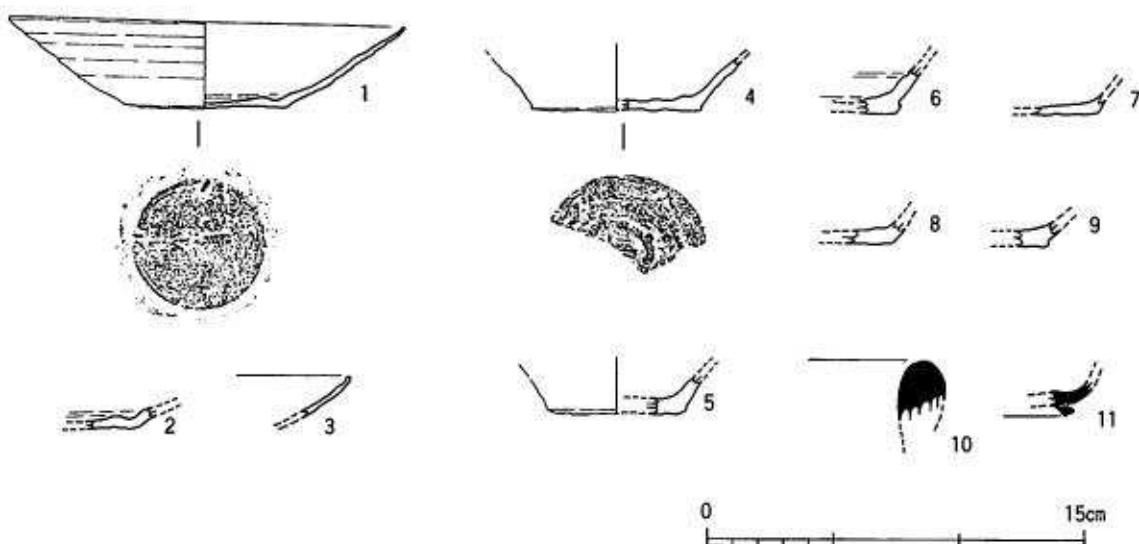
1～9は土師質土器皿である。このうち1～3は、底部に回転糸切りの痕跡を残す土師質土器皿である。いずれも淡黄白色のきめ細かい胎土をもつ薄手の製品で、平坦面1から出土している。口縁部を小さく内湾させ、体部内外面には回転ナデによる凹凸が目立つ。2・3は同一個体の可能性もある。4～9は回転ヘラ切りの痕跡を底部に残す皿あるいは杯で、平坦面4を中心に出土している。胎土には小礫を若干混じり、淡赤褐色を呈する。

10は備前焼の甕の口縁部の破片である。胎土には砂粒を含み、暗褐色を呈する。焼成は不良で、十分に焼き締まっていない。小さい破片であり、時期は断定しがたい。

11は須恵器の杯身の高台部である。外側に開く断面方形の高台が貼り付けられている。胎土は精緻で、淡灰色を呈する。奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。

以上のように、寺山城跡から出土している中世の遺物はごくわずかで、城跡との関係を検討するには不十分なものである。また、広島湾岸を含む安芸地域の中世土器の編年研究は十分に進展しておらず、その編年的な位置づけを明確にすることも困難であるが、これまでの資料の蓄積により、大まかな特徴は次第に明らかになりつつある。

まず、安芸地域の土器は13世紀に入るまでの段階で、底部の切り離しが回転糸切りになる。また楕形態が消滅し、杯と皿（あるいは大小の皿）の組み合わせが成立している。<sup>(1)</sup>これらのことは、東広島市鏡西谷遺跡、海田町畠観音免第1号古墳など、在地産と考えられる土師質土器と畿内産瓦器碗とが共伴する資料によって確認できる。この段階の土器は比較的厚手に作られており、杯の器高は比較的低く、体部がそれほど大きく開かない点に共通する特徴を見いだすことができる。こうした特徴の土器が14世紀代にも引き継がれることは、宮島町菩提院遺跡の第3遺構面における14世紀前半の吉備型土師質土器碗との共伴例からわかる。



第15図 寺山城跡出土遺物実測図（1：3）

やがて土師質土器は、口径に対する器高の割合が高くなる一方で、口径と底径との差が大きくなる方向へと形態を変化させながら戦国時代を迎えることになる。この間の具体的な変化を跡づけることのできる資料は必ずしも多くないが、例えば広島市安芸区三ツ城跡の出土遺物は、一括資料ではないものの、石鍋、白磁碗、備前焼の擂鉢・甕などから16世紀代まで降ることは考えにくい資料である。ここから出土している土師質土器も15世紀代のうちに収まるものであるとすれば、杯の体部が深く立ち上がる傾向を認めることができる。

15世紀後半から16世紀にかけての資料は、広島湾岸の中世山城跡でも何例か確認できる。この時期になると、土師質土器は器体を薄く作り、回転ナデの痕跡を明瞭に残すものへと変化している。体部と口径との差が大きく、体部が大きく開く形態に特徴があり、このような器形の製品は杯ではなく皿と呼ぶことにする。広島市東区北谷山城跡の出土遺物は、瓦質土器・備前焼・青磁碗・白磁皿などから、15世紀後半に中心があり、16世紀代に降る可能性も考えられる資料であるが、体部の開く薄手の皿が確認できる。その他、広島市佐伯区池田城跡<sup>(16)</sup>・有井城跡<sup>(17)</sup>、広島区安佐南区伴東城跡<sup>(18)</sup>・国重城跡<sup>(19)</sup>などからも、断片的ではあるが類似する資料が出土している。

以上のような広島湾岸を中心とする地域の資料に照らし合わせると、平坦面1から出土した1～3は、15世紀後半から16世紀にかけての資料と判断することが可能である。

一方、底部に回転ヘラ切り痕を残す4～9は、現在のところその位置づけが困難な資料である。ただ、広島湾岸の中世山城跡からは回転ヘラ切りの土師質土器が全く出土していないわけではない。例えば前掲の池田城跡からは、まとまった量のヘラ切り底の土器が出土している。この遺跡の出土資料でさらに特徴的なことは、畿内産の瓦器碗や備前焼の碗、吉備型の土師質土器碗など瀬戸内海を経由してもたらされたとみられる搬入品が確認できる点である。これら搬入品の大部分は戦国期のものではなく13世紀から14世紀にかけてのものであるが、それらとともに回転ヘラ切り底の土師質土器ももたらされたことが想定されている。<sup>(20)</sup>既に知られているように、瀬戸内海沿岸で中世を通じて回転ヘラ切り底の土器が使用されている地域としては、備前・備中・備後にかけての沿岸部を挙げることができ、瓦器碗、備前碗などとともに土師質土器が搬入されたことは十分に考えられる。このような例からは、当遺跡で出土している回転ヘラ切り底の土師質土器も、吉備地域からの搬入品である可能性も否定できない。ただ、池田城跡が瀬戸内海に面する場所に立地しているのに対し、寺山城跡はかなり内陸に入った場所にあることから、同一に論じることはできないだろう。ただし、寺山城跡が太田川を介した河川交通の要所に立地する点を評価するならば、搬入品としての意味を見いだすことも可能であろう。いずれにせよ、今回出土した資料はきわめて断片的な資料であり、これだけをもって判断することは危険である。今後周辺遺跡の資料への検討を深めるなかから、改めて議論すべき問題である。

註

- (1) 鈴木康之「広島県における中世土師器について」「中近世土器の基礎研究」中世土器研究会 1985年
- (2) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」I 1982年
- (3) 海田町教育委員会「畠観音免古墳群—広島県安芸郡海田町所在一」 1979年
- (4) 妹尾周三「特別史跡 嶽島 普提院遺跡」「第13回中世土器研究集会資料集」中世土器研究会 1994年
- (5) 広島県教育委員会「三ツ城跡発掘調査報告」 1987年
- (6) 広島市教育委員会「池田城跡発掘調査報告」 1986年
- (7) 財広島市歴史科学教育事業団「有井城跡発掘調査報告」 1993年
- (8) 広島市教育委員会「伴東城跡発掘調査報告」 1989年
- (9) 広島市教育委員会「国重城跡発掘調査報告」 1982年
- (10) 註6と同じ。
- (11) 鈴木康之「瀬戸内の中世土器—吉備地域の土師質土器を中心に—」「考古学から見た地域文化—瀬戸内の歴史復元一」 溪水社 1999年

## 2 可部寺山第6号古墳

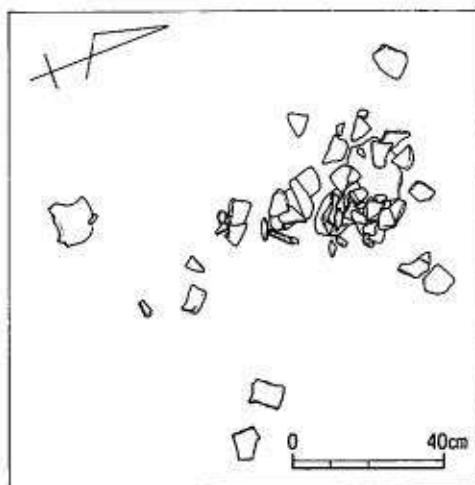
### ① 検出遺構

可部寺山第6号古墳は、平坦面2の東端付近で検出した。古墳は寺山城跡の平坦面1付近から南東に向かって伸びる尾根上に造られたと考えられる。寺山城築城及び耕作地造成によって原形が大きく変えられ、現況では確認できなかった。ところが、寺山城跡Cトレーニングの土層観察で遺構が存在する可能性が認められたため、これらの後世の造成土を除去したところ、地山面から埋葬施設1基と古墳を区画する溝1条を検出した。しかし、地形改変が大規模であり、古墳の規模や墳形等の全体像を把握することはできなかった。

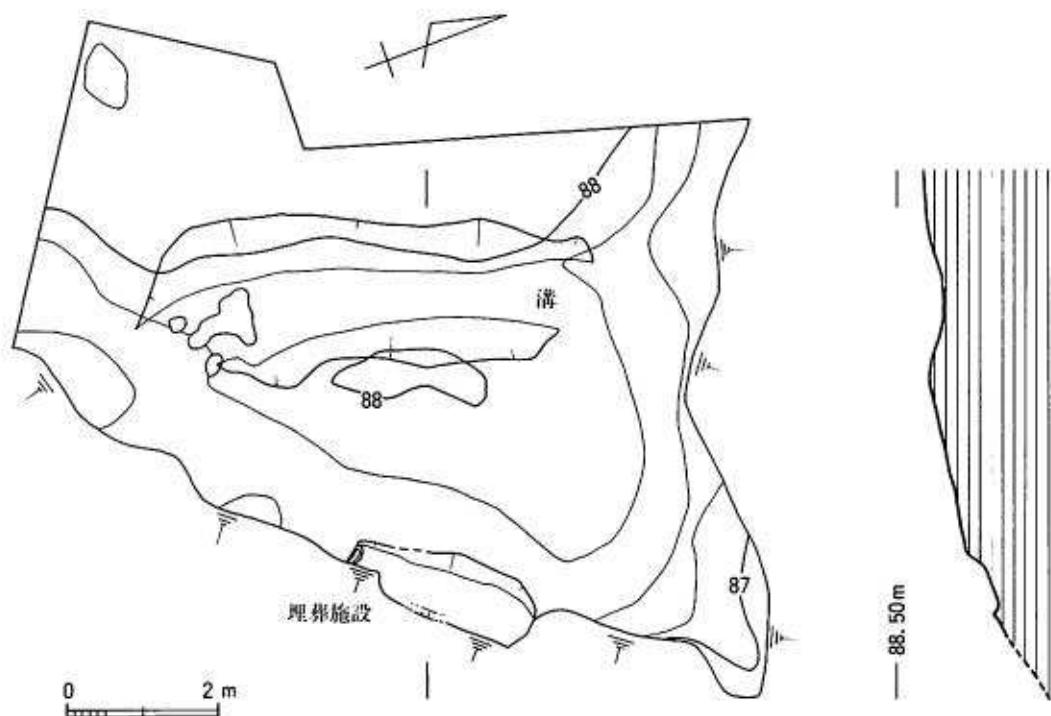
#### 溝（第16・17図、図版10-1）

溝は埋葬施設の北西側壁から約2.5m付近で検出した。上半は削平された可能性があるが、下半についてはあまり大きな地形改変を受けていないと考えられる。直線あるいは東側にやや緩やかな円弧を描く平面形で、残存規模で長さ約6m、幅1.8~2.0m、深さ0.1~0.4mで、断面形は浅い「U」字状を呈する。溝の覆土は黄褐色土の単層である。

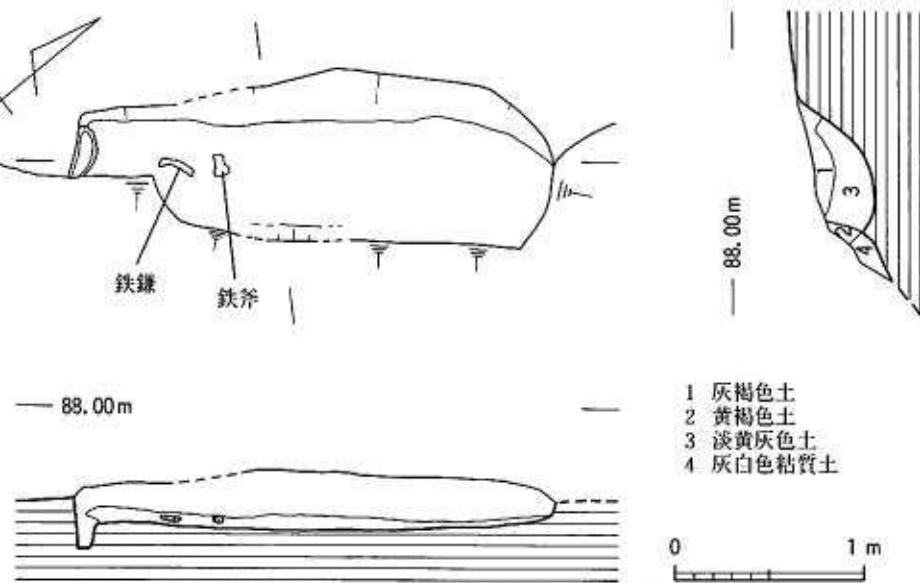
遺物は、溝南端付近、底面から約5cm上で、横倒しになったような状況で土師器の菱形土器片1個体分が出土



第16図 可部寺山第6号古墳遺物出土状況  
(1:20)



第17図 可部寺山第6号古墳地形測量図 (1:100) \*網目は土師器出土範囲



第18図 可部寺山第6号古墳埋葬施設実測図（1：40）

した。出土状況から原位置を保っていない可能性が高い。

#### 墳丘（第17図、図版10-1）

先述したとおり、寺山城跡の造成及び後世の開墾による地形改変のため墳形などは不明である。ただし、古墳を通る形で設定していた寺山城跡のCトレンチの土層を再度確認した結果、城の造成土面と地山の風化花崗岩の間に褐色砂質土層が存在しており、削り残された墳丘の盛土である可能性が考えられる。この層が古墳の盛土であるとすれば、墳丘を築く際、版築などはされていなかったと考えられる。

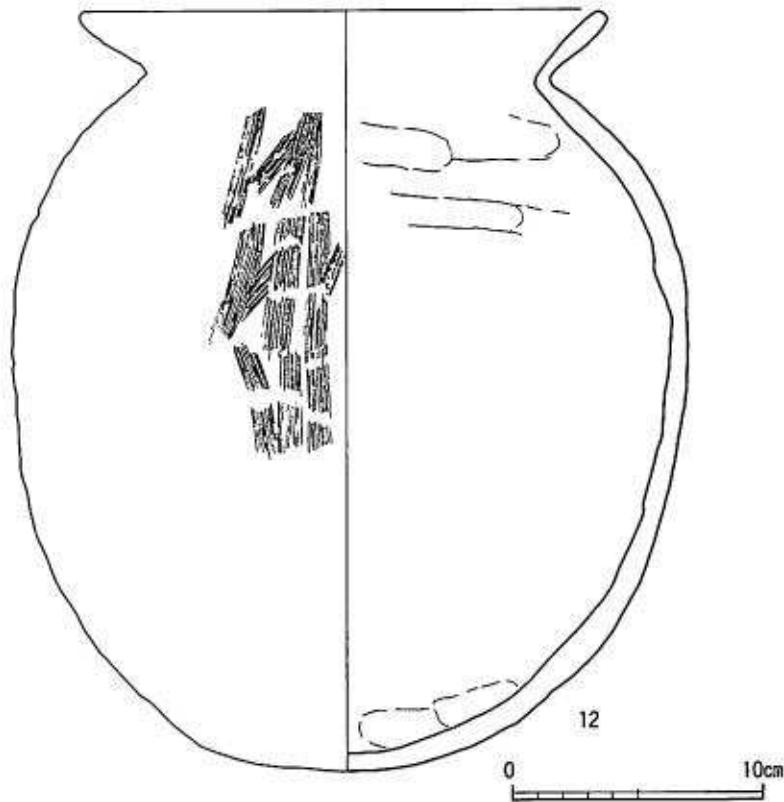
#### 埋葬施設（第18図、図版10）

平坦面2の南東隅で検出したもので、北東側小口と南東側壁は寺山城跡築城時あるいは開墾時に削られており、その他の箇所も覆土の上半は木根により大きく攪乱を受けていた。

埋葬施設の平面形は残存部分の状況などから長方形と考えられる。一部残存する南西側小口は長さ35cm、底面までの深さが約20cmである。底面には小口板痕跡と考えられる幅約12cm、深さ約12cmの掘り込みが壁際にある。北西側壁は現存する長さ2.5m、深さ16~23cmで、北東端は屈曲しており、北東側小口間近まで残存していると推定できることから、埋葬施設の全長は2.5mを大きく超えることはないと考えられる。なお、北東端には南西側小口のような小口板痕跡は認められなかった。断面形は「U」字状を呈し、底面南東側を中心に粒子が細かく、やや粘性を持つ白色土を部分的に検出した。

頭位は破壊が進んでいたため不明だが、残存状況のよい北西側壁から推定される埋葬施設の長軸方向は概ねN40°Eである。

遺物は、中央やや南西寄りの底面付近から有肩式鉄斧1点と鉄鎌1点が出土した。出土状況から、原位置を保っている可能性が高い。



第19図 可部寺山第6号古墳出土器実測図（1：3）

## ② 出土遺物

遺物は、埋葬施設から鉄斧・鉄鎌、溝から土師器（変形土器）が出土した。

### 土器（第19図、図版11）

12は土師器（変形土器）である。口縁部径21.1cm、胴部最大径は高さ16.5cmの部分で26.9cm、器高30.0cmである。口縁部は頸部から外反してややふくらみながら短く外上方にのび、端部は丸く収まるが面を持つ。胴部はやや長めの球形を呈し、明瞭な底部は認められない。調整は、外面は口縁部下半～胴部上半が縦方向のハケ調整、以下は不明。内面は頸部内面が横方向の強い指ナデ、胴部は不明、底部には指頭による強い押圧状のナデが施される。色調は外面が黄褐色～赤褐色で、部分的に黒斑が認められる。また、胴部中位付近にわずかに炭化物が付着している。内面は底部から約1/4が黒変している以外は淡黄褐色である。焼成はやや不良で、胎土には白色砂粒を多く含む。

### 鉄器（第20図、図版11）

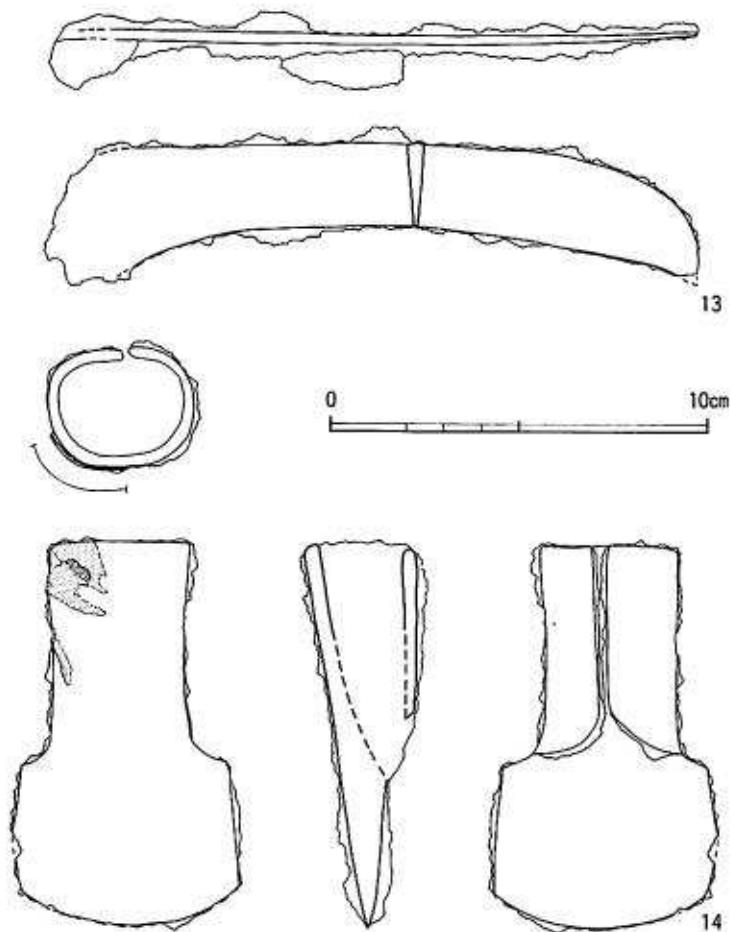
#### 鉄鎌

13は鉄鎌で、全長16.9cm、刃部幅2.3cm、重さ63.4gである。刃部は緩やかに内湾し、基部は柄に装着するためほぼ直角に折れ曲がっている。刃部には木片が付着し、基部には柄とみられる木質が一部残存している。

## 鉄斧

14は有肩式の袋状鉄斧で、袋部の断面形は楕円形である。全長10.1cm、刃部幅6.1cm、袋部の長さ5.6cm、開口部長径4.2cm、短径3.3cm、重さ208gである。刃の磨耗がほぼ左右均等であることから、手斧として使用された可能性が高い。

袋部の基部には布の痕跡が残っていた。右撫りにした太さ0.05cm～0.1cmの糸を平織で織り上げた布で、幅約1.4cmの細紐状にしたものと右巻きにらせん状に巻いている。布の重ねしろは約0.6cmで、袋部の端から約3.6cmまで確認できることから、現状では斧に3巻以上巻きつけられていたと推定される。おそらくは鉄斧と柄を固定するために使用されたと考えられる。糸の材質は不明である。



第20図 可部寺山第6号古墳出土鉄器実測図（1：2）  
網目は布痕跡が確認できる部分

## V　まとめ

### 1 寺山城跡について

今回の寺山城跡の発掘調査では、平坦面1～5を確認した。ただし、後世の削平により、平坦面以外は明確に城に伴う遺構は確認できず、遺物も少量であった。削平の程度は不明だが、柱穴などが全く見られないことから、削平以前にも柱穴などの遺構は存在しなかったと考えたい。

まず、今回の調査の成果を基に各平坦面について概要を述べていく。

平坦面1は城の中央に位置し、中心的な平坦面と考えられる。切岸を造成し、周縁の盛土に一部石材を利用するなど比較的丁寧な作りである。また、東部と北西部に通路状の掘り込みが認められ、出入口とも考えられるが、後世に作られた可能性もあることから出入口は不明としたい。

平坦面2は帯郭状の平坦面である。周囲の斜面は西側を除き急斜面で、切岸の役割を果たしていたと考えられる。このことから平坦面2は防御の重点を北東においていたと言えるであろう。平坦面2から平坦面3に続く通路状の部分の時期は不明である。

平坦面3は面積が最も広い。北西側は自然地形を利用した切岸と考えられが、南東側は傾斜も緩やかで、防御性が低く、どのような機能を担っていたか想定するのが困難である。ただ、平坦面4から出土した中世の遺物はこの面に伴うものと考えられ、当該期の活動が行われていたと想定できることや、他の平坦面との関連性から城の一部としたい。

平坦面4は平坦面3の西側を帯郭状にめぐる。西側は谷で急傾斜だが、平坦面3・4間は高低差が小さく、緩傾斜である。平坦面の配置や先述した炭化物の出土状況、造成の状況から、この面は平坦面3の開墾時に出た土で造られたもので、城には伴わないと考えられる。

平坦面5は東側以外は傾斜が急ではなく、面積も狭いが、傾斜が比較的緩やかな城の西側の防御性を高めるために造られた面と考えたい。北側の石積遺構は開墾時に築かれたと考えられる。

ここまで寺山城跡で確認された平坦面について述べてきたが、これらの平坦面と城との関係について触れておくと、平坦面1は位置や造り等からみて、本城の主郭といえる。平坦面2は位置や形態から北東及び北西方向を防御する郭と帯郭が機能的に結びついた郭と考えられる。平坦面3及び平坦面5はそれぞれ北東、北西を防御する郭といえよう。平坦面4は開墾時に造成されたと考えられる。また、各平坦面を連絡するように設けられている道状の部分は土層観察などから、城とではなく後世の耕作地との関連が深いと考えられる。

以上のことあわせると本城は、4つの郭をもつ連郭式の山城であったと推定でき、平坦面1以外は防御的機能はやや低いものの、谷のある北東方向に防御の重点をおいて造られたことが伺える。なお、平坦面1と南西側に続く尾根を遮る施設は、平坦面1の切岸のみであり、他の部分に比べ防御力が格段に低い。このため調査では平坦面1の切岸の終端付近に堀切などの防御施設が存在しなかったか特に注意して精査したが、確認できなかった。しかし、地表観察では切岸終端から約10m南西の南東斜面に尾根頂部付近まで堅堀状の窪みが見られることから、南西側の尾根にも堀切などの何らかの施設が設けられていた可能性が極めて高いと考えられる。

今回の調査では寺山城跡について次のようなことが明らかになった。

- ①4つの郭からなる中規模の城であること。
- ②活動の痕跡が乏しいこと。
- ③北東方向に重点をおいた造りであること。
- ④15世紀後半から16世紀代の間に使用された可能性が高いこと。

以下では、上記の点に立脚して寺山城跡の性格について推論していくことにする。

まず、前述した諸要素のうち、①～③と、これまでの縄張り調査<sup>(1)</sup>で分かっていた、周囲の平地との高低差が50m以上ある点などを併せ考えると、寺山城跡は一定の軍事的勢力を持つ集団が軍事的目的で築いた可能性が高い。

ところで、寺山城跡の北東約1kmには、熊谷氏の居城・高松山城跡が存在し、寺山城跡からは高松山城跡の南側を一望できる。高松山城跡に関する文献は少ないが、篠原達也氏は、熊谷氏が武田氏から離反する時期、つまり16世紀前半に高松山城跡に居城を移転してきたと推測している。<sup>(2)</sup>高松山城跡が熊谷氏の勢力範囲の南端に位置し、南（武田氏）を強く意識した点や、山頂に築造された戦略的な城である点などから、移転時期を16世紀前半とした比定は妥当と思われる。さらに、寺山城跡から15世紀後半～16世紀と考えられる遺物が出土していることを併せ考えると、二つの城は同時期に存在した可能性が高い。こうした位置的関係及び同時代性から両者は何らかの関係を有していたと推測できる。一般的にはこのような位置的関係にある場合想定できるのは、寺山城跡が高松山城跡の出城（支城）あるいは向城（付城）の2通りである。従来、寺山城跡は高松山城跡の出城と考えられており、今回の調査では両者の具体的な位置付けも視野に入れて調査したが、これまで述べてきたとおり、遺構・遺物が極めて乏しく推定も難しかった。

なお、生活の痕跡が乏しいのは、高松山城跡が比較的短期間使用された城であることから、高松山城跡と関係の深いと考えられる寺山城跡も、本格的に使用される前に軍事的緊張が緩和し、廃城となつたためではないであろうか。

一方、芸藩通志によれば、寺山城跡の所在する寺山には曼荼羅寺<sup>(3)</sup>があり、奥房、淨安寺、竹林寺など十二房を擁したとある。なお、寺山の東側麓にある上原八幡宮の北側付近にはジョウアンジという地名が今も残る。曼荼羅寺の創建年代は不明で、熊谷直実が法然上人から授かった迎接曼荼羅を納めたとする説もあるが、真偽は明らかではない。ただ、こうした状況から、寺山に当時寺社が存在した可能性は捨てきれない。すなわち寺山城跡は軍事的目的で築かれた城である可能性が高いものの、何らかの宗教的性格を帯びた施設であった可能性も否定できないであろう。いずれにしても少ない資料をもとに推論を重ねており、今後の類例を待たなければならない。

#### 註

(1) 広島県教育委員会「広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第1集」 1993年

(2) 篠原達也「熊谷氏の高松城跡—遺構の概観と史料の再検討についてー」『芸備地方史研究』第221号 芸備地方史研究会 2000年

## 2 可部寺山第6号古墳について

可部寺山第6号古墳は、大きく地形改変を受けていたこともあり、これまで知られておらず、寺山城跡の調査中発見された古墳である。

調査の結果、墓域を区画する溝1条と埋葬施設を確認した。

まず、本古墳の概要の復元を試みたい。古墳を区画する溝及び墳丘は、削平を受けているため正確な墳形や規模は不明だが、ごく緩やかに湾曲する溝のカーブを基に再現すると、円墳であれば直径12~15m程度の規模となる。一方、古墳の築かれた尾根幅は、地形測量から本来10m強であったと推測され、上記の規模のものは造り得ない。また、検出した埋葬施設と区画溝の距離は約3.5mであり、複数の埋葬施設が墳丘内に存在していた可能性が残るもの、現状では偏在した状況である。こうした地形的制約や溝の状況などから、本古墳は墳丘の有無は不明だが、方形に近い平面形をした古墳であったと考えられる。

埋葬施設は、埋葬施設の底面が「U」字状となっていることから、棺には長さ2.5m程度の割竹形木棺を使用し、両小口には小口板をあてていたと考えられる。周辺の割竹形木棺を使用した埋葬施設では、二重土坑が使用されている例が多いが、本件は上半部が削平されているため不明である。

次に、本古墳が築造された時期を出土遺物から推測する。埋葬施設から出土した鉄鎌は全体的に細身で刃が緩やかに湾曲している。この形態が製作時のものか、使用に伴う研ぎ減りによるもののかは不明だが、製作時の形態を残しているとすれば、一般に鉄鎌の刃が直刃から曲刃へと変化する<sup>(1)</sup>画期は5世紀前半以降に求められている。

鉄斧は形態を細分すると有肩式袋状鉄斧の範疇に入る。この形態の鉄斧は広島県内においては本例を含めて17例が知られている（表1）。その多くが5世紀代と考えられている遺跡や遺構から出土しているので、本例も5世紀代である可能性が高い。

溝から出土した土師器（壺形土器）は、いわゆる布留式壺を特徴づける口縁端部の内面肥厚が見られない。また、県内から比較的多く出土し、共伴する須恵器から6世紀代と考えられている土師器のように長胴化していないことから、本例はその間の期間に製作されたと考えられる。太田川下流域で当該期の土師器が出土した遺跡をあげると、太田川の上流側から、大町七九谷古墳<sup>(2)</sup>、尾首城跡<sup>(3)</sup>、長尾遺跡<sup>(4)</sup>、寺山遺跡<sup>(5)</sup>、池の内第3号古墳<sup>(6)</sup>がある。大町七九谷古墳出土例は口縁端部の内面肥厚がわずかに見られ、胴部上半の張りも強い。須恵器の共伴はなく、5世紀初頭頃と考えられている。尾首城跡出土例は、平らに収まる口縁端部で内面肥厚は見られず、胴部上半は若干張りを見せる。須恵器の共伴はなく、5世紀代のものと考えられている。長尾遺跡出土例は、平らに収まる口縁端部で内面肥厚は見られず、胴部上半の張りは弱い。5世紀中頃のものと考えられている須恵器が共伴して出土している。寺山遺跡出土例は外反する口縁部で、端部は丸く収まるが面をもち、内面肥厚は見られない。胴部上半は流れるように湾曲する。5世紀末頃のものと考えられている須恵器が共伴して出土している。池の内第3号古墳例は、丸く収まる口縁端部で内面肥厚は見られず、最大径となるのが胴部の中位あたりとやや低いが張りは強く、不明瞭なが

ら底部も確認できる。5世紀中頃を前後すると考えられている須恵器が共伴して出土している。これらの例を口縁端部と胴部の形態及び共伴遺物に注目して変遷順に並べると、大町七九谷古墳例（5世紀初頭）→池の内第3号古墳例（5世紀中頃）→尾首城跡例→長尾遺跡例（5世紀中頃）→寺山遺跡例（5世紀末）となると考えられる。

当該期の土師器は資料的に十分でなく、編年も確立していないため、詳細な年代決定は難しい。しかし、これらの例と対比させて相対的な位置付けを行うことは可能であり、本古墳例は、尾首城跡例と長尾遺跡例の中間的な形態で、長尾遺跡例よりも胴部に張りがあることから若干古い、すなわち5世紀中頃で、5世紀末までは下らない時期の所産であると考えたい。

ここまで出土遺物の年代について述べてきたが、その結果、鉄鎌は5世紀前半以降、鉄斧は5世紀代、土師器は5世紀中頃と推論するに至った。これらの年代には矛盾する点がないため、これらから導かれる5世紀中頃～後半が本古墳の築造年代であろう。

以上のことと総合すると、可部寺山第6号古墳は、5世紀中頃に造られた、土坑内に埋置された割竹形木棺を埋葬施設とする、方墳あるいは溝で区画されたのみで墳丘を持たない古墳であった可能性が最も高いと考えられる。

最後に以上の推定を基に可部寺山第6号古墳の歴史的位置付けを行っていく。

本古墳の埋葬施設には割竹形木棺が使用されている。太田川下流域ではこれまでに約54例の古墳時代前～中期の古墳が調査されているが、そのうち割竹形木棺を埋葬施設とする古墳は約18.5%にあたる10例あり、当時の比較的一般的な埋葬施設であったと考えられる。これら木棺の規模は2.0～4.8mで、長さ約4.8mの虹山古墳<sup>(7)</sup>、長さ3.5mの権地古墳A主体<sup>(8)</sup>以外は全て2m台であり、本古墳も平均的な規模の範囲に入る。埋葬施設の長軸方向は10例中7例がN50°E～N80°Eの間にあり、埋葬施設の長辺である北西側壁の方向が約N40°Eである本古墳も概ねこの範囲に入ると考えられる。こうした埋葬施設や先述した古墳の外部構造の状況からは、当時の太田川下流域で平均的な有力者の一人であった被葬者像を思い浮かべることができる。

築造場所について触れると、本古墳は周辺地域の中では規模の大きい可耕地が広がる可部の盆地に面した丘陵に立地している。同一丘陵上には本古墳以外に可部寺山第1号～第5号古墳が存在し、このうち第2号～第4号古墳は平成14年度に調査されている<sup>(9)</sup>。これらの古墳は出土遺物から本古墳とはほぼ同時期あるいはやや新しいと考えられており、この丘陵が古墳時代中期において墓域として認識されていたことが窺える。ただし、本古墳は、可部盆地とは反対側の谷底平野に面した斜面に築かれているのに対し、その他の古墳はいずれも両方の平地から望むことができる尾根頂部に築かれている点で若干異なる。なお、本古墳が存在する丘陵上にある古墳はいずれも太田川下流を遠くまで見通せる位置に築かれており、太田川下流域の沖積平野を見渡せる丘陵上を選地するという太田川下流域の古墳時代前半期の古墳の立地と共通点が見出せる。

まとめると可部寺山第6号古墳は、可部の盆地よりも太田川下流域の沖積地を意識して選地・築造された古墳で、被葬者は墳丘や埋葬施設の状況から、他の集団に対し突出した勢力を持つには至らなかった集団の有力者が築いたものと考えたい。

## 註

- (1) 古瀬清秀「農工具」「古墳時代の研究 第8巻 古墳II 副葬品」1991年
- (2) 財団法人 広島市文化財団「大町七九谷遺跡群」1999年
- (3) 広島県教育委員会「尾首城跡発掘調査報告」1984年
- (4) 財団法人 広島市文化財団「長尾遺跡」1999年
- (5) 財団法人 広島市歴史科学教育事業団「寺山遺跡発掘調査報告」1997年
- (6) 広島市教育委員会「池の内遺跡発掘調査報告」1985年
- (7) 虹山古墳発掘調査団「虹山古墳発掘調査報告」1989年
- (8) 広島市教育委員会「九郎丈遺跡 権地遺跡発掘調査報告」1984年
- (9) 財団法人広島市文化財団「第21回青空ミュージアムin可部寺山1号遺跡発掘調査現地説明会資料」 2002年

表1 広島県内有肩式袋状鉄斧出土地地名表

番号	遺跡名	所 在 地	遺跡の種別	立 地	時 代
1	権地古墳	広島市安佐南区祇園町平原	古墳	丘陵頂	古墳／中期
2	池の内遺跡	広島市安佐南区祇園町長束	集落	丘陵尾根	弥生、古墳
3	大谷遺跡	広島市安佐南区祇園町南下安	集落	丘陵尾根	弥生、中世
4	高陽台A地点遺跡	広島市安佐北区高陽町矢口	集落	丘陵尾根	弥生／後期
5	地蔵堂山第1号古墳	広島市安佐北区高陽町金平	古墳	丘陵頂	古墳／中期
6	西願寺遺跡群D地点	広島市安佐北区高陽町矢口	古墳	丘陵尾根	古墳／中期
7	月見城遺跡	広島市佐伯区五日市町倉重	城跡、古墳	丘陵頂	弥生、古墳／中期・後期
8	松ヶ迫F地点遺跡	三次市東酒屋町	不明	丘陵尾根	不明
9	四拾貫小原第1号古墳	三次市四拾貫町小原	古墳	丘陵頂	古墳／中期
10	上四拾貫第3号古墳	三次市四拾貫町上四拾貫	古墳	丘陵尾根	古墳／中期
11	上四拾貫第6号古墳	三次市四拾貫町上四拾貫	古墳	丘陵尾根	古墳／中期
12	日南山第2号古墳	高田郡吉田町西浦	古墳	丘陵尾根	古墳／中期
13	板迫山第1号古墳	山県郡筒賀村上筒賀	古墳	丘陵頂	古墳／中期
14	中出勝負峰第9号古墳	山県郡千代田町丁保余原	古墳	丘陵尾根	古墳
15	梶平塚第2号古墳	比婆郡東城町三坂苅山	古墳	丘陵尾根	古墳
16	亀山第1号古墳(第2次)	深安郡神辺町道上	古墳	丘陵頂	古墳／中期

## 掲載文献

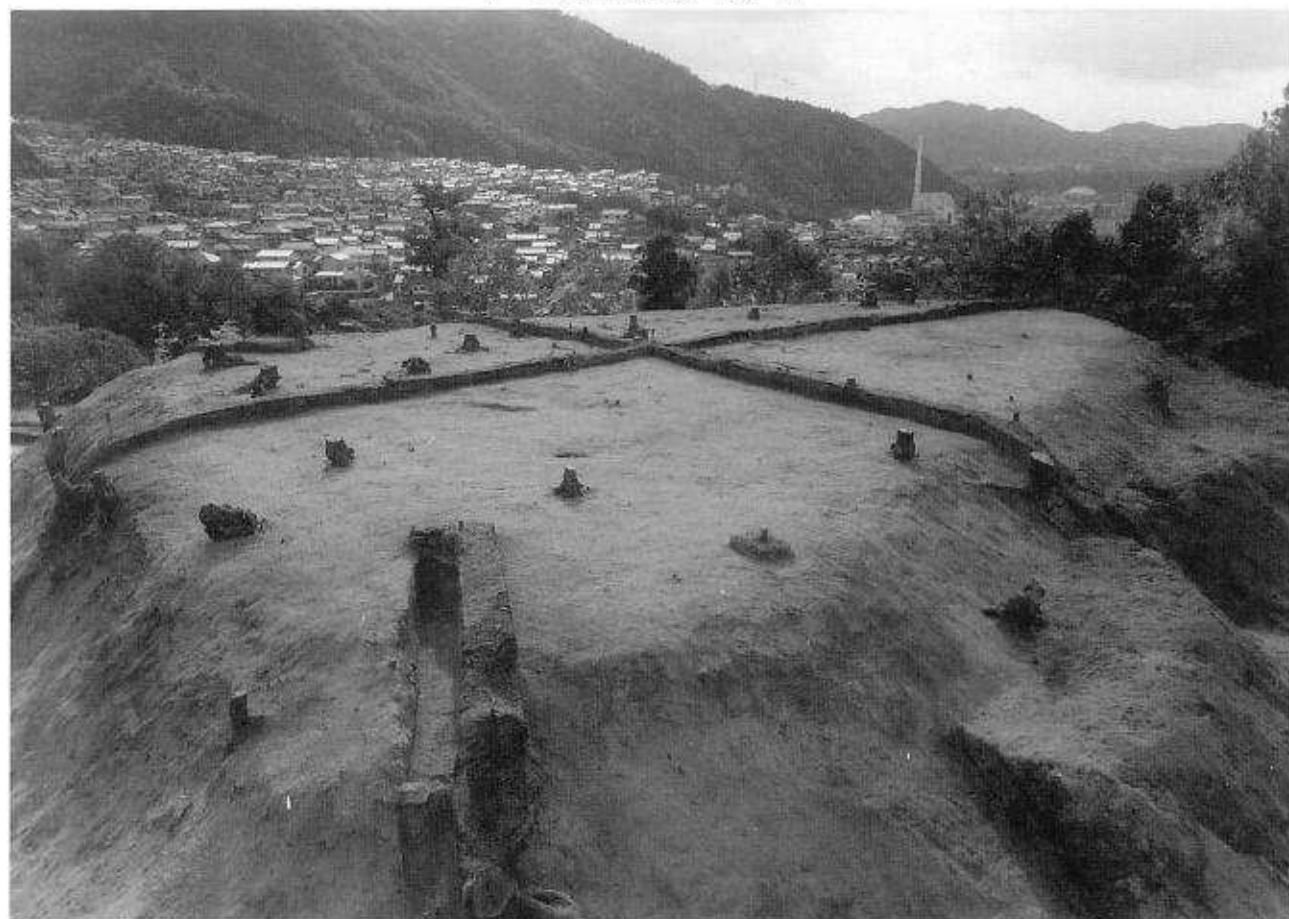
遺跡名	掲載書名	発行機関	発行年
1 権地古墳	九郎丈遺跡 権地遺跡発掘調査報告	広島市教育委員会	1984
2 池の内遺跡	池の内遺跡発掘調査報告	広島市教育委員会	1985
3 大谷遺跡	広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告	広島市教育委員会	1984
4 高陽台A地点遺跡	高陽台遺跡群発掘調査報告	広島市教育委員会	1982
5 地蔵堂山第1号古墳	高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告	広島県教育委員会	1977
6 西願寺遺跡D地点	西願寺遺跡群	広島県教育委員会	1974
7 月見城遺跡	月見城遺跡	財团広島県埋蔵文化財調査センター	1987
8 松ヶ迫F地点遺跡	松ヶ迫遺跡群発掘調査報告	広島県教育委員会・財团広島県埋蔵文化財調査センター	1981
9 四拾貫小原第1号古墳	四拾貫小原	四拾貫小原遺跡発掘調査団	1969
10 上四拾貫第3号古墳	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)	広島県教育委員会	1978
11 上四拾貫第6号古墳	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)	広島県教育委員会	1978
12 日南山第2号古墳	高田郡吉田町 日南山古墳の発掘調査	吉田町・吉田町教育委員会・吉田町開発公社	1974
13 板迫山第1号古墳	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)	広島県教育委員会	1982
14 中出勝負峰第9号古墳	歳ノ神遺跡群 中出勝負峰墳墓群	財团広島県埋蔵文化財調査センター	1986
15 梶平塚第2号古墳	梶平塚第2号古墳発掘調査報告書	財团広島県埋蔵文化財調査センター	1997
16 亀山第1号古墳(第2次)	亀山遺跡	広島県教育委員会	1983



毒山城跡全景（上空北東から）



1 平坦面1 調査前（北から）



2 平坦面1（北から）





1 平坦面2 東側調査前（東から）



2 平坦面2 東側（東から）



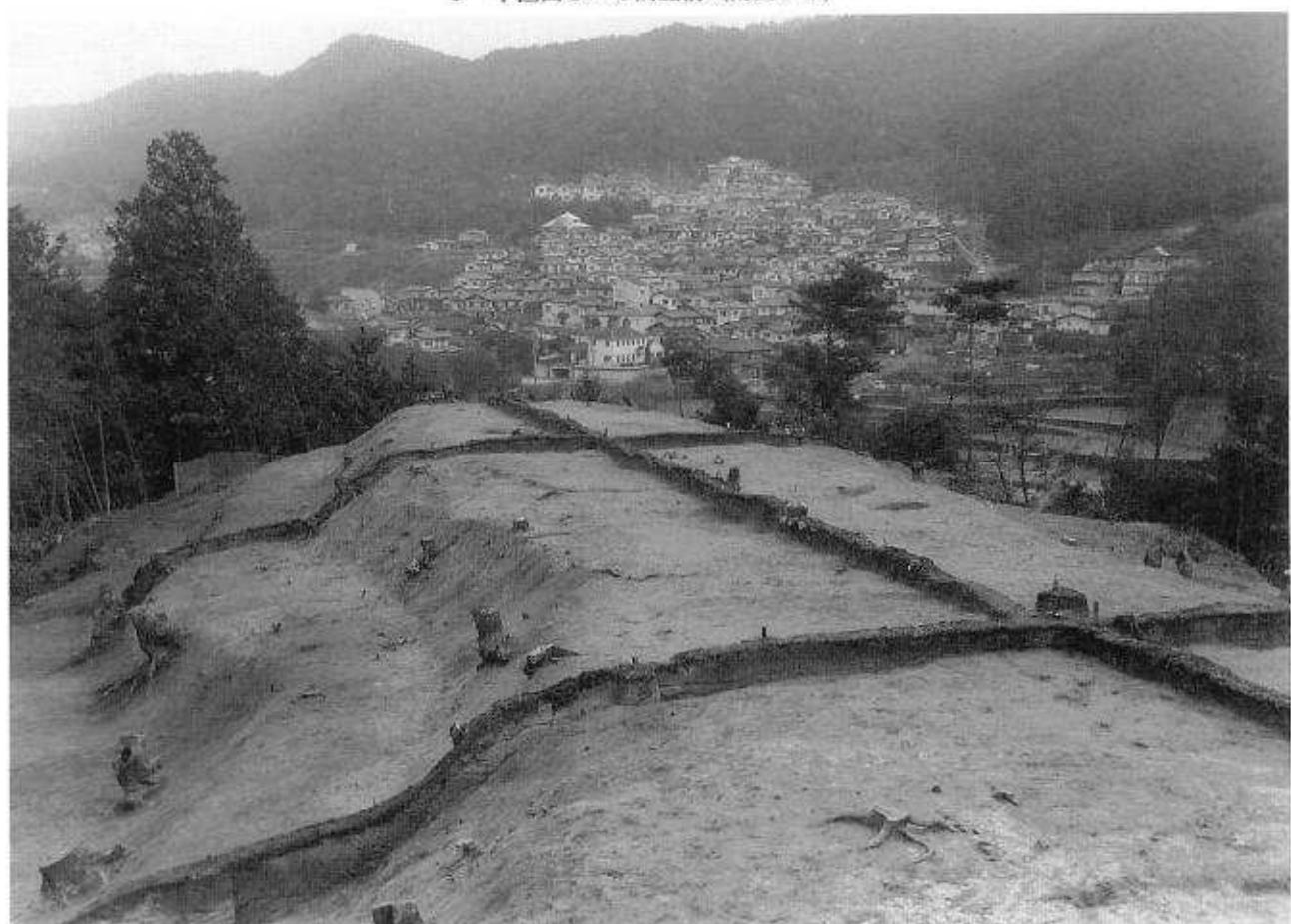
1 平坦面2西側調査前（北西から）



2 平坦面2西側（北西から）



1 平坦面3・4 調査前（南西から）



2 平坦面3・4 (南西から)



1 平坦面 5 調査前（南東から）



2 平坦面 5 （南東から）



1 平坦面 1 ~ 4 (東から)



2 小平坦面 (南西から)



1 SK1  
(南西から)



2 SD1  
(東から)



3 石積遺構  
(北東から)



1 可部寺山第6号古墳全景（南東から）



2 埋葬施設  
(南東から)



3 鉄器出土状況  
(南東から)



1



5



12



1



-



-



14



-



13

出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	てらやまじょうあと							
書名	寺山城跡							
副書名	県立可部高等学校移転事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	鍛治益生・鈴木康之・葉杖哲也・渡邊昭人							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / °	東経 ° / °	調査期間	調査面積	調査原因
てらやまじょうあと 寺山城跡	ひろしまけん 広島県 ひろしまし 広島市 あさきたく 安佐北区 かべく 可部町	34106	210	34度 30分	132度 31分	2002.10.7 ~	1,980m <sup>2</sup>	広島県立可部高 等学校移転事業
かべてらやまじょうあと 可部寺山第6号古墳			208	58秒	11秒	2003.1.31	50m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
寺山城跡	城跡	中世	平坦面・石積	土師質土器・陶磁器			15世紀後半～16世紀の城跡	
可部寺山第6号古墳	古墳	古墳時代	埋葬施設・区画溝	土師器・鉄斧・鉄鎌			城の造成により壊された古墳	

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第5集

### 寺山城跡

#### 県立可部高等学校移転事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成16(2004)年3月25日

編集 財団法人 広島県教育事業団事務局  
埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町4丁目8番49号  
TEL(082)295-5751 FAX(082)291-3951

発行 財団法人 広島県教育事業団

〒730-0011 広島市中区基町4番1号  
TEL(082)228-8451 FAX(082)228-8441

印刷所 株式会社 耕文社